


連続公開シンポジウム 「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」 第2回「学校図書館メディアの構成」記録

(2016年5月29日(日) 実施；立教大学池袋キャンパスにおいて)

吉田右子「学校図書館メディアの構成」の教育実践

連続公開シンポジウム
「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」
第2回 学校図書館メディアの構成

2016年5月29日(日)
立教大学 池袋キャンパス
1104教室
筑波大学図書館情報メディア系
吉田右子



本日の構成

- ・筑波大学における司書教諭資格付与科目の開講
- ・私の教育実践
- ・授業内容と日程
－司書教諭講習を例にして
- ・教材
- ・主体的に学ぶための課題
- ・授業の工夫

皆さん、こんにちは。吉田です。私は筑波大学の図書館情報メディア系に所属しています。なぜ私がここにいるのかということは、後ほどお話します。個人的に学校図書館がすごく好きで、児童サービスにもとても興味をもっているのです、今日は楽しく発表したいと思っています。本日は私が筑波大学で「学校図書館メディア」の構成を担当していた当時の経験をお話しします。筑波大学はちょっとややこしいというか、講習と授業を両方やっているのですね。ですので、そこら辺のお話を最初にさせていただいて、その後、私の教育実践ということでお話をし、配布資料に入っていない隠しスライドを五つぐらい忍ばせてありますので(笑)、それをご紹介します。

司書教諭講習の話は、スライドにデータの的なことを書いておいたもので、ご覧いただくことにして、ここにはない話をします。

(1) 筑波大学 情報学類 知識情報・
図書館学類における授業開設の状況

学校図書館司書教諭講習規定に定める科目	筑波大学における開設授業科目	開設学年
学習指導と学校図書館	学習指導と学校図書館	3年次
学校図書館メディアの構成	学校図書館メディアの構成	3年次
読書と豊かな人間性	読書と豊かな人間性	3年次
情報メディアの活用	情報メディアの活用	3年次
学校経営と学校図書館	学校図書館論	3・4年次

(2) 筑波大学(図書館情報メディア系)
における司書教諭講習

- ・目的：学校図書館法(昭和28年法律第185号)第5条第3項に基づき、大学その他の教育機関が文部科学大臣の委託を受けて、学校図書館司書教諭講習規程(昭和29年文部省令第21号)による講習会を実施するものである。
- ・日程：7月末から8月第1週
- ・受講者の資格：教育職員免許法(昭和24年法律第147号)に定める小学校、中学校、高等学校若しくは特別支援学校の教諭の免許状を有する者又は大学に2年以上在学する学生で62単位以上を修得した者とする。
- ・定員：75名

－出典：筑波大学図書館情報メディア系 平成26年度学校図書館司書教諭講習実施要項

最初は全般的な状況ですけども、筑波大学では学部を学群、学科を学類という不思議な名前と呼んでいます。私が所属するのは情報学群、知識情報・図書館学類です。ここで司書

教諭科目を開設しています。それともう一つは司書教諭講習です。学科にあたるほうでは、ほぼ司書教諭の講習規程に定められている科目と同じものを展開しています。開設学年次としてはわりと学年が上になってから履修する形です。知識図書館情報学類は2004年に筑波大学と統合してできた組織なのですが、その前は図書館情報大学という大学でした。図書館情報大学は教員の資格が出せなかったのが、司書教諭の講習もやっていなかったのです。筑波大学になってから司書教諭講習をはじめて、茨城県の司書教諭講習指定大学になっています。

開講状況

- ・受講者（書類申請除く・延べ数）見込み数：75人
- ・修了者（書類申請含む）見込み数：160人
- ・「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」をワンセットに
- ・「学校経営と学校図書館」「学校図書館メディアの構成」「情報メディアの活用」をワンセットにそれぞれ隔年開講

データはここに示すとおりなので、それをご覧ください。スライドに示されている全部の科目を毎年開講することはできないので、科目セットを作っています。「学習指導と学校図書館」、「読書と豊かな人間性」をセットに。「学校経営と学校図書館」、「学校図書館メディアの構成」、「情報メディアの活用」をセットで。ですので、茨城県の教諭の方々は2年かけて単位を取得することになります。なぜ全科目を揃えられないかというと、非常に単純な理由で教員の負担が大きすぎるので、2年に1回だったら何とかがんばれると、そういうことです。ただし、講習を担当するのは全員が筑波大学の教員ではありません。筑波大学の大学院の修了生にお願いしながら、筑波大学の教員が1名入って開講しているという状況になっています。

実施要領

- ・受講者の決定：次の順位及び申込順で決定
 - －① 現職教員
 - －② 教員免許を既に有する者
 - －③ その他の者
- ・単位の認定：科目ごとに、出席時数と試験、レポート等によって成績審査を行い、合格した者に対して学長が認定する。
- ・受講料：無料参考書、教材、その他の費用は各自負担

実施要領

- ・修了証書及び単位認定証明書：
 - －（１）学校図書館司書教諭講習規程第3条の定めるところにより、5科目10単位を修得した者に対して、文部科学大臣が修了証書を授与する。
 - －（２）講習で受講した科目について単位を取得した者に対して、学長が単位認定証明書を発行する。
- ・予算：文部科学省からの委託費による。
- ・授業時間数 75分の授業を4コマ×3日分

受講生は現職教員、教員免状を既にもっている方、その他の方という感じになっています。いろいろなバックグラウンドをもつ方が③には含まれているのですけれども、大多数は現職の先生です。そして修了証書を出します。

私の教育実践

- ・（１）図書館情報専門学群／知識情報・図書館学類の授業
－ 2004年4月～2009年3月
- ・（２）司書教諭講習
－ 2004年、2005年、2006年、2007年、2009年
- ・ 担当理由
－ 司書科目「コレクションとアクセス」を担当

早速、私の教育実践に移りたいと思うのですけれども。実は、お話があった時に中村〔百合子〕さんにもお伝えしたのですが、私の場合、現役感がないのですが、「それでもいいから」ということだったのでここに参りました。なぜ私が司書教諭の科目を担当しているかというと、学類で「コレクションとアクセス」という司書科目の「図書館資料論」にあたる科目、新カリキュラムの名称でいうと「図書館情報資源概論」を担当しています。この科目は司書教諭の

科目でいうと「学校図書館メディアの構成」に該当するので担当せよということになりました。

今日は講習のお話をしたいと思うのですけれども、少しだけ学部の方の授業の特徴をお話しておきますと、司書教諭科目を履修するのは知識情報・図書館学類の学生が多いとはいえ筑波大学の全学で開講されているので、他学類の学生が来ます。特に多いのは教職課程を取っている体育専門学群や芸術専門学群の学生です。かなり癖のある二つの学群の学生が受講するのです(笑)。実は他学群から学生が受講すると結構、やりにくいのです。と申しますのも、知識情報・図書館学類では1年から専門科目を学ぶことが特色となっていて、この科目の標準履修年次の3年になると図書館情報学の知識がかなりあります。一方、体育専門学群と芸術専門学群の人たちは基礎知識がまったくありません。図書館にもほとんど行ったことがないとか、そういう学生がいるので授業の展開がかなり難しいということは他の先生もおっしゃっていました。

履修者の特徴（講習）

- ・ 公立小・中学校及び義務教育学校の教員
－ 県教育委員会による募集
- ・ 高校教員
- ・ 教員教員免許所有者
- ・ 筑波大学大学院生
- ・ その他 図書館関係者（学校司書等）

講習の話を今日はしていきたいと思います。来ていらっしゃったのは公立の小中高の先生方で、茨城県教育委員会による募集でした。ここに来るにあたって平久江〔祐司〕先生にレクチャーを受けてきたのですけれども、茨城県では基本的には学校に2名司書教諭を置くことを司書教諭講習の目標にしていたそうです。ですので、2005年あたりから2010年ぐらいまではかなり講習受講希望者がいたのけれどじょじょに減っているとおっしゃっていました。つまり司書教

諭が2名いる学校が多くなってきているということなのだと思います。年に150人ぐらいずつ、ずっと2004年から司書教諭の資格を出してきたのもう10年以上経ちます。そしてこの講習には教員の方だけでなく筑波大学の大学院生も混じるのですね。5、6人混じっているときもあるのですけれど、これがまた、ややこしいのです。実は私たちは図書館情報メディア研究科という大学院をもっているのですけれども、図書館とついているのに大学院では司書資格も司書教諭資格も取れないのですね、それで、わざわざ外側から取るようなとても不思議な仕組みになっているので、教職課程をすでに取った大学院生が司書教諭講習に参加しています。いろいろな方が混じっていますけれども、基本的には、教員の人たちが多かったです。

授業内容

1.はじめに	8コレクション形成の実際
2.学校図書館メディアの構成の理解	9.メディアへの知的アクセス支援
3.司書教諭に求められる知識と技術	10.メディアへの物理的アクセス支援
4.学校図書館メディア	11.メディアの組織化-目録法
5.学校図書館メディアにかかわる情報源	12.メディアの組織化-分類法
6.コレクション形成の意義と評価	13.メディアの組織化-件名法
7.コレクション形成の計画策定	14.課題と展望

1日目午前	ガイダンス：講習全体の見取り図を示す 講義1：学校図書館メディアとは 講義2：メディアの種類
1日目午後	講義3：メディアにかかわる情報源 ビデオ→ディスカッション→ミニレポート
2日目午前	振り返り：昨日のレポートについて／復習 講義1：コレクション形成方針 講義2：コレクション形成のための計画
2日目午後	講義3：コレクション形成の実務 ビデオ→ディスカッション→ミニレポート
3日目午前	振り返り：昨日のレポートについて／復習 講義1：メディアへの知的アクセス 講義2：メディアへの物理的アクセス
3日目午後～ 4日目午後	資料組織化（別の先生がご担当）

今日、私が一番最初に話すことになったのは、私の授業内容がオーソドックスだからという理由なのですが、確かに授業は非常にオーソドックスに行なっていました。これは茨城県の教育委員会からご指導があるという理由で、シラバスとかをきっちりと書かないと、結構、修正が入りまして何回か書き直したりして、非常にそこは厳しかったです。

表向きのシラバスをちょっとというかだいぶアレンジして、これが実際の講習日程です。ここで一番声が小さくなってしまおうのですが、この科目では資料組織化つまり分類目録にあたる部分が非常に重要で、先生によってはかなりの部分を資料組織化にあてているという話を聞いたりもするのですが、ここの部分は分類目録の専門の先生がやってくれるという素晴らしい環境にありまして、私はその図書館資料のところだけ担当すればよいという年もありました。すべてを担当しなければならない年もありましたが、今日は、私にとってはやりやすいほうのものを提示していて、このスライドの最後の11・12・13という後半のところは資料組織化の部分に該当しますが、そこはしっかり専門の先生が教えてくださっていました。

ビデオ教材

- 『多様な側面からとらえた図書館サービス－情報技術、運営形態、連携協力、施設計画－』
（3）公共図書館による学校支援サービス
- 千葉県市川市中央図書館・市川市教育委員会教育センター
－「学校図書館の資料サポート」に着目
- 石川県白山市立松任図書・白山市学校図書館支援センター
－「授業に活用する学校図書館」に着目

教材なのですが、私は樹村房の『学校図書館メディアの構成』（小田光宏編，2002）を使いました。その当時は一番新しいテキストでしたが、今はまた新版が出ていて確認したら内容が全然変わっていました。この科目はメディアの進展を取り入れていかなければいけないのだと思いました。ビデオ教材なんかもその当時は新しかったのですが、今はもっといろいろと出ているかと思います。

ディスカッションのテーマ

- ・ 第1回テーマ
 - －授業で扱った特定のトピック（さまざまな資料、自校資料、資料の選定等）を1つ選び、自校の学校図書館の状況に重ね合わせて話し合ってみましょう。
- ・ 第2回テーマ
 - －学校図書館あるいは学校図書館コレクションがどのようになっているか、図書館を授業に活用できるようになるでしょうか。
 - －図書館活用を阻害する課題とその克服方法について話し合ってみましょう。

図書館にあまりなじみのない先生が来ていたので、自分の経験から何か話せるようなことを議論のテーマとして設定しました。

ミニレポートのテーマ

- ・ 第1回課題
 - －自校の学校図書館メディアの状況
 - －将来の整備について考えること
- ・ 第2回課題
 - －図書館資料のウィーディングと除籍について考える
 - ・どんな不要な資料が問題？
 - ・何からはじめるのか？
 - ・どうやって進めていきますか？
 - ・誰に応援を頼めるのか？

ミニレポートのテーマ

- ・ 第3回課題
 - －学校図書館における<コレクション形成の計画>に関して、司書教諭が果たす役割について
 - －学校図書館における<コレクションの更新>に関して、司書教諭が果たす役割について
- ・ 第4回課題
 - －『学校図書館白書4』（全国学校図書館協議会 編 全国学校図書館協議会 2004）より「夢のある理想的な学校図書館施設」
 - －「学校図書館メディアのあり方」に焦点を当てて、このモデルについて意見を出す
 - －実現可能な学校図書館についてのアイデアを出す

教員の方々が受講生の大多数だったので、とにかく主体的に学べることを意識しました。その一方で集中講義ですので、本当に疲れてしまうのです。教えるほうもそうなのですが、たぶん受講生はもっと疲れてしまう、それも猛暑の中です。教えるほうも受講生も朦朧としながらやっているのです（笑）。ですので、ディスカッションをしたり、ミニレポートを書いていただいたと、とにかく座学はなるべく少なくする形を考えました。ディスカッションは、

レポートも図書館のことを知らなくても書けるテーマを設定して、そのうえで図書館の話も入れてくださいというふうにお願いして書いていただきました。ミニレポートは次の日の授業までに必ず見て、授業後に朦朧としながらもコメントを入れるようにしました（笑）。いつも生徒の書いたものに赤を入れている方たちなので、赤を入れられるとものすごく喜ばれるのです。ただ、一つだけ大変困った問題があって、先生方は揃って字がうますぎる（笑）。私の字は見るに堪えないのでそれだけが申しわけなかったのですが、それでもコメントをもらえたのがものすごく嬉しかったというのが感想にあったのでせつせと入れました。50名分ぐらいですね。

授業の工夫なのですが、そうですね、私が担当していた頃は、とにかく学校側ではせつせと司書教諭になってもらわないといけないという時期で、意に沿わず来ていらっしゃる先生もやはりいらっしゃったのではと思います。そういう先生が心を上向きにしてくださるよう授業をしなくてはいけないなあ

ということは結構、意識していました。あと学校図書館って公共図書館と違って、人が入ることによってすごく変わりますよね、だからそのビフォー・アフターみたいな光景をわりとわかりやすく、こっちが人がいなかった図書館、こっちが人が入った図書館みたいなビフォー・アフターの写真なんかを例にして、学校図書館でこんなに変わりますっていうことは強調しました。あとは司書教諭になっても他の業務の軽減措置はないわけで、でも先生方は皆さん責任感が強いので、それまでの業務があるけれども司書教諭になったら何かやらなければならないと考える、そのストレスがものすごいことがわかりました。

司書教諭のためのTips 5分間で図書館のためにできること

- 計画
 - 主に自分の机で。頭の中でも。5分間のプランニング。
- 書架整理
 - 図書室に実際に出向いて。5分間のウィーディング。
- 風通しのよい図書館をめざす！
 - 空間も、情報もオープンに。

ですので、とにかく5分でできること、ここに書いたのですけれども、そんなにたくさん時間を割かなくても、図書館にとにかく一日5分でも心を寄せましょうっていうようなことを考えて提案しました。それは例えば頭の中で図書館の年間計画を立てることだったりとか、5分間の書架整理とか。学校図書館では書架整理って非常に重要だと思うのです。ですから5分間でいいのでウィーディング (weeding) をしましょうって話をしたりしました。

アメリカの実践の紹介

- アメリカ公教育ネットワーク、アメリカ・スクール・ライブラリアン協会 著、足立正治、中村百合子 監訳 『インフォメーション・パワーが教育を変える！』
- 高陵社書店, 2003
 - コレクション・マップの作成
 - 学校図書館の改装：より良い学びのために



それで役に立ったのがこれ『インフォメーション・パワーが教育を変える！』です。私にとってバイブルですね。

ここにはアメリカの実践がいろいろ書かれていたのですけれども、担当科目に引きつけて考えると「図書館を風通しのよいメディアセンターにしよう、図書館はメディアセンターになりましょう」というお話が書いてあります。この本のコアとなるトピックをミニレポートのテーマにしたり、自分の学校で何ができるのか考えてみましょうと問いかけをしながら、アメリカの学校図書館は考えているよりも遠い存在ではない、すぐに明日から使えることがたくさんありますね、みたいにしてこの本を要所要所で使いました。

写真は多用しました。というのも司書教諭の講習をやっていたころ、ちょうど在外研究で北欧に行っていて帰国直後でした。ありがちですが、かぶれていたのですね(笑)。向こうの図書館に。学校図書館の写真も撮ってきていたので、それをいっしょ

メディアセンターになる！

- 学校図書館は、校内すべてのメディアについて把握しておく必要がある。
 - メディアの一元管理（最も効率的）を目指す。
 - 理想：図書館がすべて購入し、各教科や部門の教員が図書館に借りに行くパターン
 - 現物が散在する場合でもデータベースは作成したい
- コレクション形成は学校運営の一部。
 - コレクション形成は学校の理念に沿って行う

に見ました。図書とコンピュータが同居するハイブリッド・ライブラリーとかコンピュータで学びながら同時に雑誌や書籍を閲覧している写真を示しながら、いろいろな学びの可能性がありますね、という感じに紹介しました。特に強調したのが「とにかく書架はゆるゆるにしましょうね」ということ。書棚にぎっしり図書を排架している学校図書館が多いのですが、「一冊取ると一段全部の図書が丸ごと出て本が散乱しちゃうようなそんな体験を子どもたちがしたら、一生トラウマになって学校図書館に行かなくなっちゃいますよ。とにかく書架はゆるゆるにしておきましょう」ということは何回も叫んだような気がします(笑)。書架って結構、重要だと思うのですよね。

学校図書館で移民・難民の子どもたちの宿題支援をしていることも紹介しました、もう時間がないのですけれども、資料収集の話は、私が学類で図書館資料の科目を担当しているので、アメリカのコレクション収集の例、文科省の基準（「学校図書館図書標準」）、全国 SLA の基準（「全国学校図書館協議会図書選定基準」）の話なんかも、実際の例を紹介しながら授業で扱いました。

LGBTQの子どもたちに

- 自分の性的志向を守っていくための情報
- Oak Park Public Library
 - LGBTQ Books for Teens (PDF)
 - <http://oppl.org/collections/transgender-resource-collection>

Lesbian

Bisexual

Gay

Transgender

Queer & Questioning

Books for Teens



最後になりますが、もう一度この科目を担当できるとしたら……学校図書館が本当に好きなので、とても担当したいのですけれども……。最近、学校図書館関係の動画がたくさんあります。ですので、そういう動画を使ってアメリカとかヨーロッパの学校図書館をもっと身近に感じていただけるように紹介したいなと思います。それとやはり LGBTQ (lesbian, gay, bisexual, and transgender, queer and questioning) は資料やメディアの話としては非常に重要で、

自分の性的志向を守っていくような情報を図書館で提供する、学校図書館はそういう可能性があることも授業の中に入れていきたいと思っています。ありがとうございました。

青山比呂乃「学校図書館メディアの構成」の教育実践

こんにちは、青山比呂乃と申します。

**教育実践共有シンポジウム2016
「学校図書館メディアの構成」**

関西学院千里国際キャンパス 図書館
中等部・高等部 (SIS)
大阪インターナショナルスクール 幼小中高 (OIS)

司書教諭 青山 比呂乃

2016年5月29日 立教大学池袋キャンパス

ここにあるように本業は幼小中高の生徒がいる学校の司書教諭です。今回の発表のお話があって、ちょっと研究者の方が多い先生たちの中で、どんなかなあと思ったのですけれども。逆にそういう意味では現役司書教諭としてやってきている内容を、どんなふうに大学で教えているのかということについてお伝えできればと思ってやってきました。

「学校図書館メディアの構成」自体は実は一昨年まで教えていて、やはり、今はもう

大学側の整理統合で担当しなくなってしまっているのですけれども、そのあたりのプロフィールから話をします。2005年、今、お話で出てきたのとちょうど同じ頃にお話があって、大学で教えはじめました。

その前にまずは「司書および司書教諭としての」職歴ですが、私自身が、実際のところ、司書教諭という資格の内容はどこにも何も教わらず、申請だけで取ったという人間なのです。どういうことだったかというと、大学はICUに行っていたのですけれども、一切、資格は取れない。長澤「雅男」先生が「図書館学」という名前の授業は開講されていて参考資料の話とかをしっかりと教えていたということはあるのですけれども、ICUにある授業はそれだけで、司書になりたかったら、それこそ講習しかないと、[大学在学中に] 鶴見大学

の夏期講習に行って司書資格を取りました。そして、講習なので教職（免許）をもっていないと司書教諭の講習を受けられなくて在学中には取れないため、そのまま司書〔資格〕だけとって大学を出て、最初はアルバイトからはじめて次の年にはなんとか正規の職員になって働いていた。ということで、東京で大学の図書館員を、当時の名前で日本獣医畜産大学なのですけれども、約5年半しました。そこでそのまま大学図書館員、医学系の大学図書館員で行くか、っという時点で、本当は行きたかった学校図書館、そういう学校図書館を作るという話がたまたまあって、その場所が関西だけれどもいいや、と応募したところ、何とかそこにに入れて今に至っているという職歴です。

これが私にとっては結構、重要な職歴で、なぜかと言いますと、まず、私には図書館で働きたいという思いはもともとあったのです。東京の出身なのですが、東京の私学中高で、朽木〔久子〕先生という先生がいらっしゃるころがあったのですけれども、私学の中高図書館の中ではそれなり〔の図書館だったのではないかな〕、本はものすごく毎週20冊ぐらい新しいのが入ってきていたという記憶はあります。読書のための、という形で作られていた図書館で、中学も高校もどちらにも図書館があって、それぞれで借りられて、私にとっては中学2年生で図書委員になって以来、どちらかという図書館は働く場所だったのです、ずっと。本を借りて大量に読んでいましたけれど〔図書館にいる間は読まず〕、図書館の貸出とか返却とか元に戻すとか、さらにそのうち、だんだん読書指導じゃないですけど「こういう本、ありませんか」って聞かれて、案内をしたりとか、本当にそんなことをしていたので、中3ぐらいになったら「このままこういう仕事をするとしたら、それもありだけれど、そんなのでいいのかな」と思っていたという記憶があるのです。

そういう思いがあるまま、いちおう大学にはちょっと違う方向に行きたいなと思って行きたけれども、結局、社会教育とかいろいろ考えて、やはり図書館の司書の資格を取って図書館に入った。アルバイトで〔母校の〕学校の図書室と鶴見〔大学〕で紹介された短大図書館で働いたりしながら、結局、この大学の図書館員になった。実際のところは、その短大図書館のアルバイトと大学の図書館で、まずひととおり、司書のいろはを教えていただいた。

当時（1985-1990）の大学図書館、医学系なので、まだインターネットは普及していないけれども、パソコン通信、なんたらカプラに電話機の受話器をはめるという、そういう時代に、研究のはじめに、パソコン通信でMEDLINEとかそういうデータベースを使って文献を検索して、コピーを手に入れて、みたいなことがはじまっていた時代です。大学の図書館ですが、それこそ医学系なので医学教育自体にお金が行くので、図書館のほうは手書きの目録カードを作っていたという状態で、整理の仕事としてはそういうことをしていました。でも、その中で最先端の研究者はそういうオンラインのネットワークで先行研究を探し出して、そこから研究をはじめているというのも一方で見ていた。〔先輩の図書館員が代行検索をするのを〕見ながら、そこで出てきた文献を『学術雑誌総合目録』という冊子体で、どの図書館にあるかを見て、申し込みをして、取り寄せをして、研究者とか学生に渡すというそういう仕事もしていたのです、この大学図書館員の時に。

その中で、この日本の高校までの課程の中でどこまでこういう（図書館資料・論文検索、論文作成といった）ことを教えているのか。と言えば、ほとんど何も教えていない。にも関わらず、大学に行ったら、そういう〔世界に伍する〕レベルの研究をしようというところでは、そこのレベルの話を〔学生に〕していかなければいけないのに、それ自体は大学の先生たち、〔実際は〕助手の先生だつたり任されているため、どこまで学生を訓練するかは、人によってかなり開きがあるっていう状態でした。ここ〔つまり、大学に入る前〕までに、〔読み書きそろばん同様のリテラシーとしてやっておいてよいこと、〕できることはいっぱいあ

るのじゃないか、と思ったというのが、そもそもの私の中の「司書教諭としての活動の」原点になっています。

それから、大学の司書をしていた中で、機会があって学校図書館に就職することになった。しかも、その学校図書館が、今からまたお見せしますけれども、ちょっと変わった学校なものですから、その中で「なるほど【学校図書館で】こういうことができるかな」という実践をしていって、その環境がそのまま今の学校、日本のすべての学校に適用できるわけではないので、どこまで可能かということはあるのですが、「こういうことが日本の学校でもでき得る」ということを何らかの形で、示していきたいなという気持ちで実践をしてきました。

そのうちに、こういう大学でも、司書教諭の課程を教えるというお話が来て、少しでも還元できればという意味で、ずっとやってきました。ただし、10年（2005-2014）続けた大阪樟蔭女子大学の方も、大阪大学外国語学部の方も、実際、大学の学部整理統合とかの過程で、今は終了しています。樟蔭の方は関屋キャンパスと小坂キャンパスが二つにわかれていたのが、今では一つにしてしまったので、なくなった関屋キャンパスの非常勤は終わりになってしまったということです。阪大外国語学部の方は、もともとともともと大阪外国語大学だったものが、阪大に吸収されて外国語学部になった時（2007年）に、それまでの「昼夜開講制の」「夜間」がもう閉鎖されることになったのですが、その移行期間だけ教えに来てくれる人を、ということで、3年間（2008-2010）だけ行きました。

ということで、樟蔭は、最初の内は中学校、後半は小学校の先生になりたい学生、女の子たち、そんなに勉強大好き、ではないのだけれども、学校の先生になって、小学校ぐらいの先生になってという人たちが、「司書教諭」資格を取りたいなと来るといって、だいたい10数名から20名前後の学生。阪大の方は外国語学部なので、高校で英語の先生、という人が多いところの司書教諭取得もしくは教職課程の科目の一つとして来るような学生層でした。

あと、他には、「樟蔭と阪大では2009年から」「情報メディアの活用」も教えるようになり、南山大学でだけ「学校図書館と学習指導」を「2011年から現在も」教えています。ということで、この辺が私のプロフィールになります。

そういうふうなので、「大学の授業では」私としては学校図書館とはどんなところなのかという点に関して、私なりの経験から、まず話すということをしています。実際に主に夏期の講習は集中講義の形でしているのですが、そこで教えるにあたって、「学校図書館とは何」というのを最初に学生にもアンケートをしたりします。学校図書館については、人によって経験、もっている印象、実際どんなものだったのか、が、かなり違うと思うので、そういう意味でも、私の場合、私が働いている図書館、私の働いている学校は、こんなところでこんなことをしている、という紹介をまずはしています。そして、図書館で働く人は何をしているのかという話を、学生にします。

図書館司書は何をしている？

- ・ 利用者と資料を結びつける仕事
- ・ 利用者の必要を知り、必要に応える資料を**収集**
- ・ 集めた資料に利用者が自分でたどりつけるように**整理**
- ・ 利用者と話しながら、本当に必要な情報は何かを探る — **レファレンス**

これは私がそう思っているということでもあるのですが、私はもともと大学の図書館司書として、最初、刷り込まれたこともあって、まずは司書の仕事、図書館で働く人の仕事とは何か、ということをこのように説明します。「図書館のライブラリアンとは何をしているのか」というと、ものすごく単純に小学生でもわかりやすく、と考えると、利用者と資料を結びつける仕事をしている」。だから、使う人が必要とする資料を「収集」しているし、そして使いたい

人が自分で資料にアクセスできるように「整理（組織化）」している。そして、場合によっては利用者本人が「何の情報を必要としているか」わかっていないということもあり、どうしても見つからないという場合に、本当に必要な資料、必要なことは何なのかということを探り出して、提供する、「レファレンス」もしているという、簡単に言えば、そういう仕事をしているのだという説明です。

先ほどお話に出てきた教科書、私もほとんど同じ教科書を使っていたのですが、そこにも紹介されている学校図書館とは何をしているところなのかということです。この話は学校に限らず、あらゆる図書館でそうだと思うのです、学校の図書館の場合の実際は何なのかと言えば、小学校児童、中高生徒の読書を支援する、及び学習に関する支援、それと教員が生徒自身は使わなくても教員がその教育活動のために必要なものを支援するという三つの役割があるだろうという話です。

学校図書館の司書・司書教諭

- ・ どうやって生徒が**自分で**調べられるように、読みたい本を手にとることができるのか
1. 読書センター
 - － 年齢（発達段階）・性別・言語等に応じた読み物の把握
 - － 生徒の状態の把握
 2. 学習情報センター 探究型学習を進めるために
 - － カリキュラムの把握・図書館資料の把握
 - － 教授法の開発（各教員との協働）
 3. 教材センター
 - － 教員の抱きたいピック・カリキュラムの把握
 - － 「わがまま」を聴く

そして今、文科省の指導要領が戦後のいろいろな変遷を経て、現在、探究型学習がかなり言われるようになった中で、学校図書館の重要性がそこでも言われています。それと同時に、「図書館の仕事が」さっき言ったようなこととすれば、学校「図書館」の場合、公共「図書館」などと違うとすればどこなのか、と考えると、児童・生徒が自分でそういうこと（情報探索など）ができるようになるための教育をしているところである。情報リテラシーを身につけさせる

ためにはどうしたらいいのか、という意味で、どのようにして自分で調べられるようにするのか、読みたい本や情報を手にとることができるようにするのか、というのが、結局、学校図書館の司書や司書教諭がやっていることであるという説明です。

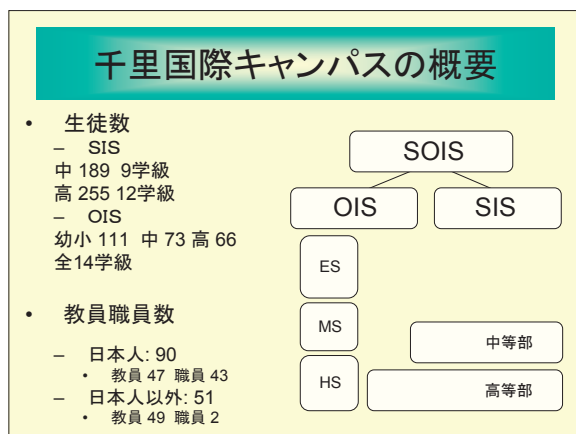
読書センターとして考えた場合、発達段階とか性別とか、あと私の勤めている学校の場合、この後ちょっと紹介しますが、言語の習熟度、その他によって、読み物であってもいろいろな必要性がありますしね。生徒自身の状態によってももちろん違います。そういう意味では、「利用者である」生徒「の状態」がどうなのかをちゃんと教員として把握できるか、ということになります。

それから学習情報センターとして、探究型の学習を推進するという意味では、「まず利用

者のもつ必要性としての] カリキュラム自体を把握する、そういう意味で学校の中で何が行われていて、どういうことをしようとしていて、何が必要なかを把握する。そして、逆に図書館に資料として置けるものがどんなものなのか、資料の内容をちゃんと把握する必要があるという話をします。それに対してそれを使ってどういうふうに今後進めていけるのかということ、[中高なら] 各教科の先生、[小中高とも] 担任の先生とかと、まだこれから発展していくものだと思うので、共同して実際のカリキュラムを開発するような部分が必要であらうという話もします。

それと3番目の教材センターとしても、同じことですがけれども、教員の方のカリキュラムのための必要性を把握する。最後に「わがままを聴く」と[スライドに書いていますが]、わりと日本の先生たちは概して「お忙しいのに、こんなことをお願いするのは申しわけないのだけれど」というような、悪い意味で謙遜な面があるで、[本来の職務からして] やりたいことのために、本来ちゃんと図書館にリクエスト=要求を出してもらうべきであって、それが来ないとこちら図書館ははじまらないのだけれども、それがなかなか出てこないという面がありますよね。だから、そういう意味で本当に親しくなって、本当にしたいことは何なのか、どういうことなら可能性があるのかっていうことをちゃんと引き出さないとしないということ。本当はこういうことがしたかったのに、何それだったらこれができるのにというのが、こちらも出せないという面があるなと思います。逆に言えば、本当の意味でいい意味での、「わがまま」というか、今できていないけれども、本当はこういうことがしたいのです、という潜在的な要求を先生たちからどれだけ引き出していけるかによって、図書館が本当に役に立つ、こういうふうに使えんじゃないか、と先生方の認識が改まっていくのでは、というふうな話もします。この辺は、要するに司書や司書教諭にならなかったとしても、先生となった時に、学校の図書館にそういうリクエストを是非してほしいという意味でも、学生に話しているという意味もあります。

さて、ここでさっきから言っている、うちの学校の特殊性というのを、ざっと説明します。



これは、ちょっと前のデータなのですが、SOIS と言っているのはキャンパス全体の名前で、OIS というのは Osaka International School と言います。SIS: 千里国際中高 Senri International School と英語で呼んでいるのですが、この SIS が帰国子女受け入れをしている中学高校、OIS はインターナショナル・スクール (IS: International School) です。東京にもたくさんありますけれども、英語のカリキュラムで授業をしているのです。そちらは幼

稚園から高校まで、1 学級ずつ全学年ある学校です。東京でいうと、ASIJ: American School in Japan は、非常に大きい学校で、それに比べるとかなり小規模の学校なのですが、でも 4 歳から 18 歳までのすべての学年をもっていて、しかも IB スクールなのでかなり高度なカリキュラムを推進していて、という英語ですべての授業をしているのが OIS という学校です。Elementary School、Middle School、High School と全部あります。ここに書いたとおとおりで、人数的には学年 1 クラスで全 14 学年の学校、プラス、こちらの SIS の中等部と高等部が今は、全学年 4 クラスになりました。といっても、1 クラスが 20 名程度

という形です。その中で、ここにあるように、教員が50人ずつぐらい、日本人と日本人じゃない人が半々ぐらいでいる状態で、どちらの学校でどういうふうに教えているのかちょっと複雑です。

基本 SIS は日本で日本の文科省のカリキュラムで日本語で教育をしている学校、OIS は北米型の WASC: Western Association of Schools and Colleges (米国西部地域私立学校大学協会＝アメリカに本部がある教育認定機関) 及び IB (International Baccalaureate) のカリキュラムによって、英語で教育を行っている学校です¹⁾。その二つの学校が両方〔の生徒〕を一緒にした授業をしたり、同じキャンパスの中で同じ施設を使ったりしながら、共同でやっているという、ツイン・スクールと言っていますが、ちょっと変わった学校です。クラブやスポーツなども一緒、生徒会等も一緒にやっていたり、またはまったく別々でやっていたりします。その中で、図書館は一つで、全部の生徒・教員（保護者）を対象にしています。



パッと見は、こんな感じなのですが、ちょっと写真がかぶっていてそちらに写ってないかもしれませんが、約1千平方メートルで吹き抜けになっています。



この図の下側部分にだけ上の階があり、そこはマルチメディアフロアと呼んでいて、小さい部屋がいくつもあるように見えますが、利用者が使う部屋は一つだけあって、あとは機材倉庫だったりスタジオだったりになっています。右の上のここが学校全体のサーバールームになっていて、ここがスタジオで、ここが機材倉庫で、ここだけがコンピュータ・ルームなのですが、1階のこの辺に生徒が使えるコンピュータが置いてあって、あとは全部開架の、閉架

書庫が一切ないという図書館です。奥まったところに、箱詰めした図書を入れておく場所ぐらひは少しあるのですけれども [十分ではありません]。



これがちょっと前の〔英語資料担当の〕ライブラリアンで、この人はカナダ人でしたけれども、お話を幼稚園の子たちにしているところです。こういうふうに幼稚園、小学生の子たちは週に一回、図書館の時間に〔英語での〕お話の時間があります。この写真は、普通に空き時間に生徒が自習しているところなのですが、特に高校は単位制をとっていることもあり、生徒は各自の時間割を自分で組むので、〔極端に言えば、時間割は生徒一人ひとりで違うため〕学内での生徒の動きは、大学に非常に近いのです。低学年の必修科目がほとんどの時は、空き時間はほとんどないけれど、選択科目が多くなり、だんだんできてくる空き時間の時にはずっと図書館にいて何かをしている、ということが可能なので、図書館側としては、さぼっているのか、空き時間にいるのかはわからない、本人たちが勝手に来て勝手にいる、という、本当に大学の図書館みたいな動きをしていると思います。

中でも、中学生も来る昼休みはそれなりに人口が多いですけど、昼休みも固定してなくて、4時間目、5時間目が人によって〔時間割上〕昼休みになるという形です。図書館内のこの辺に、生徒が自由に使っていいコンピュータがあって、生徒は全員中学1年の時にコンピュータの使い方をひととおり教わりますので、それによって自分のIDとパスワードをもって、自分のフォルダもサーバーに置いてある状態で、宿題等をここですることができ。一切規制をかけていないので、見かけて何か変だったら個別指導が入りますけれども、基本は何をしても自由です。それは学校全体に校則が非常に少ない、ほとんどない学校なので、他の人に迷惑をかけるとか、そういうことをするのでなければ、自分で自己管理をなさいとしているので、同じように図書館の中もそうになっています。

そこで、さっき言ったような〔図書館員の仕事の〕話で言えば、こういう学校で、利用者がいったいいかなるものかということをちゃんと把握する必要があるわけです。この場合、こういう生徒が来ているということになります。

SIS・OIS生徒のタイプ

1. 日本で教育を受けた日本人
2. 日本在住の外国人
3. 外国で教育を受けて帰国した日本人生徒
 - ・ 卒業後の進路などを考え
主として何語で教育を受けるかで選択
 - ・ 入学時、各生徒は、主に日本語のモノリンガル
または2つ以上の言語のマルチリンガル
 - ・ 在学中に日英の2言語は必修
さらに他の言語も選択履修できる

多様性が必要な読書のための資料

英語が第1言語の
帰国生徒

日本語が第1言語の
一般の生徒

英語などが母語の
外国人生徒

さっきも言ったように、帰国子女の子たち、日本に在住の外国人、それとごく普通にこういう学校に入りたいなと思ってきた日本で生まれ育った日本人が、一緒に学校で学ぶことによって、何が起こるか見ようという学校として1991年にできましたので、その中で、いろいろな場合があります。

[例えば、同じくらい良く英語ができる生徒であったとしても] インター (OIS) つまり英語でやっている学校のほうにちゃんと入って、そのまま、例えばアメリカの大学に進みたい、ずっと英語で教育を受けてきたから、英語で勉強を続けたいという場合もありますし、[ご両親の思いとして、子どもは] 日本人で、日本のアイデンティティをもつためにも、ちゃんと日本の教育を受けさせたいから、日本の学校のほうに入れて、でもせっきくの英語力のキープはさせたい、この学校だったら英語の上級のクラスもあるし、それができるから、という、そういう意味で来る場合もあります。いろいろな生徒及び家族の思い、ご家庭の方針

があったうえで、インターに入ってくる生徒と、こちらに入ってくる生徒がいて、一方で、日本語のモノリンガルで普通の日本人として入ってきて、英語をここではじめてやる子もいます。今、だいたい、小学校で英語を教えるようにはなりましたが、ほとんど英語ははじめてという子たちもいるし、または諸事情によって[国際結婚など] 家庭的な意味で、もしくは海外赴任したからというので、二つ以上のマルチリンガルの生徒もいます。

在学中は、日英両方を必ずやることとなっているので、まったくはじめて、例えばUSJを立ち上げるためにアメリカからやってきた方のお子さんの場合。その時はそういう子たちがいて、その子たちはまったくはじめて日本語を習うことをいちおう何年かやって、少しはちょっとしゃべれるようになったぐらいで引きあげていったみたいな場合もあります。どんな子が来るかというのは、いうなれば、海外の日本人学校にどんな日本人がいるのかと同じように、インターに来る子たちは、どんどん入れ替わっていく可能性が高い。でも一方で大阪在住のインド料理屋さんを営んでいるインド人のご家庭の大阪で生まれ育った、大阪弁ペラペラのインド人の女の子もいるわけです。本当に一つ一つのご家庭や生徒によってその辺の事情はさまざま、言語的な状況もさまざま、本人の能力によってマルチリンガルになっている場合もあれば、日本語が弱いんだけど、英語もどっちつかずみたいなことになっている場合もあるという、そういう状況の生徒たちがいるという学校だ、ということになります。

その中で、読書のための資料と言っても、日本語や英語の授業に関してもさまざまなレベル分けもしているということもありますし、第一言語が何かというと、英語が母語という場合もあれば、そうでない場合もあるのです。日本語が第一言語の一般生もいるし、日本人だけれど英語のほうに第一言語の帰国生もいるし、というそういう状態です。

そこで、この学校で私が非常に刺激を受けていたのが、インター[ナショナルスクール(IS)]が[同じ場所に]あるわけです、ISの方が、つまり、アメリカ、さっきは北欧の話が出ましたが、OISは、インターナショナル・スクールとしての普通の学校として教育活動をしている面があるので、そこではいったいどんなふうに図書館を使っているのか、図書館がどういうふうになっているのか、などを垣間見るという形で、刺激を受けました。



〔このスライドは〕図書館に〔授業で〕来る場合、どんな本を見ていて、どんなふうに使っているのかというのを、ちょっと簡単にまとめたのですが、最初は絵本から入って、図書館の時間にお話を聞いて好きな本を借りていく。そのうち、小学校の2、3年生ぐらいから「チャプター・ブックス」と呼ばれる、要するに、お話の本でも、さし絵は入っているけれども、絵本とは違う、こういう「ちゃんとした本が」読めるようになった、というアイデンティティになります。

ます。それが、小説、フィクションになっていって、そのうち、高校生ぐらいになると、文学作品の分析もするわけです。

一方で、小学校のレベルから「ファクト・ブックス」と呼ばれている、調べるための本というタイプの本がそこそこ存在します。今は日本でも、調べ学習とかが出てきてから、かなりそういうものが出版されるようになったのですが、この学校をはじめたころの〔日本語の図書の出版状況の〕印象は、特に中学校向きの図書で、調べるために中学生が読んでちゃんとわかる、例えば AIDS の本とかは、ほとんど存在しなかった。AIDS が話題になり出した頃に、AIDS について難しい本は出はじめたのですが、中学生や高校生、高校生はまでも、小・中学生が調べることができるような本はなかったです。

あと例えば、gun control（銃規制）というトピックが、ずいぶん昔ですけれども、ハロウィーンの時に撃ち殺されてしまった子どもが出た時にありましたが、あれはずっと繰り返されている悲劇でもあって、アメリカでもずっと gun control を、何とかしないとダメ、というのは常に話題にあがっていて、要するに一般市民が銃をあれだけ持っている、ということに関して、常にアメリカでは高校でディスカッションとかディベートをしているわけです。それをするための資料として、本が存在するのです。ところが日本の場合、そういうことがほとんどありえないので、つまり本がないわけですよ。だから、単純に考えれば、日本語の本があったらそれに対する英語の本がある、英語の本に対して日本語の本はあっていいようなものなのですから、実は出版されているものの内容がだいぶ違うので、同じように揃えようと思っても揃わないわけです。こっちでは話題にするけれど、こっちでは話題にしない、そこまでタブーとは言わなくても、タブーなのかな、みたいなトピックもあるわけです。〔出版業界としては〕売れなければ作らないと、買われなければ作れないですね。だから、どんなにいい内容、こういうのがあればいいのにというものであっても出版されない、という出版事情の問題もあるなということが、こういうところからもかなり見えてきました。

そして、〔英語圏では〕小学生レベルから、ただ教科書〔の補足的内容が〕全部まとまっている資料集とか、教科書だけを使うのではなくて、小学生の3年生、4年生、それから

うちちょっと上の学年の子が、調べて使えるような、例えば、環境問題に関する本とかいろいろなものが、もっと単純なレベルの雷の本とか、竜巻の本とかそういうものすべてが、かなりあるのだなということがわかってきました。特に中学ですね、日本の場合、中学校では、高校受験のためという意味では、教科書と問題集しか使わないような時代だったこともあって、今、ちょっと変わってきたと思うのですけれども、アメリカのほうの中学レベルで調べるための図書がいろいろとあるということには、なるほどと思われました。

その後、高校になると〔本格的なリサーチに入っていくのですが〕、中学の時から、英語の先生で週1回図書館に来て、中学生に雑誌の記事を読め、という授業をする先生がいました。難しければニューヨーク・タイムスやニュース・ウィークの記事とかナショナル・ジオグラフィックの記事など、そういう類のものをももちろん読ませますけれど、そこまででなくても、もう少し易しいレベル、小学生レベルのいろいろ易しい雑誌があって、そういうものを買って〔図書館に所蔵し〕、そういう記事を読んで、何か考えるとかっていうことを、図書館での授業の対象にする。日本で雑誌を読んでもという、「遊んでる」とか「レクリエーション」という印象が強かったのが、そういう資料も英語で教育する内容として入ってるのだな、という認識もまた一つありました。

高校ぐらいになったらそういうものが雑誌記事 (magazine articles) を使ってリサーチをする、という方向にどんどんなっていきます。それが、オンラインのデータベース、開校当時はまだ最初マイクロフィッシュだったのが、CD-ROM になり、それがどんどんオンライン・データベースになっていった、という経緯があります。もちろん、私がそこに来た頃は、マイクロフィッシュになる、その前に、冊子体でちゃんと高校レベルの雑誌記事索引があったのです。それが、どんどんどんどんオンライン化していったわけですが、〔オンライン化以前の問題として〕中高生レベルでも既に〔雑誌記事のトピックごとの〕データベースが〔冊子体や追録形式の〕紙媒体で存在しているということが、なるほどと思われた面ではあります。大学ではもちろん、さっきお話したようにデータベースはありましたし、JICST の雑誌記事索引とかそういう日本でもデータベースは作られているわけですが、「中高レベルの内容で使えるデータベースが存在しているのか」「〔これが、大学・専門家レベルの Medline などのデータベースの世界につながっていくのだな〕」という感慨でした。

ことばに親しむために 英語圏の場合

- たくさんの言葉の獲得 そのために
 - 家族の協力 読み聞かせ
 - 定期的読み聞かせ 教室・図書館
 - 英語の授業の宿題 例:毎週100p読む
- 創作
 - やさしい本(絵本)を読む
 - 自分で絵本を書いてみる
 - 小学生に読み聞かせに行く

もう一つ、これは、面白かったことの一つなのですが、[英語圏では] 読み聞かせには、[教育課程としての] 意味があるという話。日本にはじめて来た幼稚園の先生が「日本の子どもはひらがなを覚えたら読めるからいい」と言うのです。英語圏の場合は、幼稚園で一番大変なのは、ABC を覚えても apple とは読めない。だから、いっぱい聞かせて、聞いて覚えた apple という単語が、綴りを一所懸命、apple と書くことを覚えて、音と綴りを結びつけるということ

とをしていなくちゃいけない、という、そういうことなのだとということに気づかされたのです。

日本だと「日本語は」漢字「の学習」が大変と思っている人も多いじゃないですか。英語圏の先生に言われたことがあるのが、「日本人はひらがな、カタカナ、漢字にアルファベットと多種の文字を使い続けている。特に漢字」、何でひらがなだけでやらないの、日本語はということでした。山ほど漢字を覚えて漢字を使い続けて、ああやっているというのは、アルファベットのみの言語しか知らない人には、大いなる疑問です。

それに比べて、逆に英語は「アルファベット 26 文字だけで」簡単だよなって思ってしまうのは、そうではなくて、実は読み書きをはじめるには、難しいことなのだとことです。音からは全然、書けないわけですよ、幼稚園生、小学生。それを書けるようにするための教育を、小・中でやっている中で、「子どもにおうちでも、たくさん読み聞かせをしてください」と担任の先生が言って、親御さんにも本を図書館が貸しているのです。それは何が「大切なのか」と言ったら、「日本でいう単なる読書の勧めというより、もう少し深刻な言語習得上の問題として」この時期に、言葉をとにかくシャワーで聞かせて、耳から言葉を覚えるぐらいになったのと、綴りを結びつけるということが、このレベルでの必要な教育で、図書館がそんなふうに使われているのだなということがわかったということです。

ことば＝概念形成のために

自分の第1言語で
読む機会を増やす

それ以外の言語も
日頃から読む機会

落ち着いて
基本的なことばの力
＝概念形成を
促すことが可能

耳から入る
言語の定着
新たな言語獲得
につながる

というふうに、ここでいろんな気づきが入って、さらには、言葉＝語彙がないと概念形成ができなくて、概念形成ができないと基本的に勉強が積みあがっていきません。例えば3、4年生ぐらいの漢字とか言葉が抜けることによって、その後がガタガタで全然学力が伸びない、となってしまう生徒がいることもわかってきました。そういうにさまざまな状態の子どもたちに対応していくのに、図書館は個別対応に向いている教育施設だと言えそうです。

学習活動の実際 2: OIS Gr6

- 調べ学習 - 小学校高学年から中学にかけて
- 表現方法: 体を使った表現

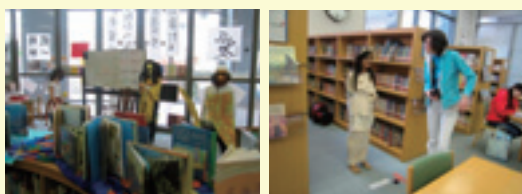
→ 単なるレポートや読み上げの発表ではない
→ 本人になりきる: 遊びの要素・覚えてしまう

学習活動の実際 2: OISGr6



- 古代エジプト調べ
- 発表形式:
 - エジプトの神々になり自分の紹介をする
 - 話す内容は暗記
 - 見に来た人が足下のスイッチを押すと話し始める

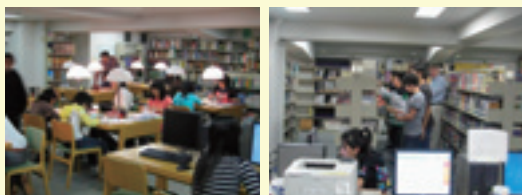
学習活動の実際 2: OISGr6



実際、学習活動のこの事例を、大学の学生にもこう見せて、こんなことをしているよと説明します。6年生ぐらいでエジプトを調べて、エジプトの神々、ラーとかになって、本人になりきる形で自分のことを語る、という発表の仕方をしています。この発表の仕方についても話します。つまり、図書館がどう使われていて、どんなふうな発表をするからこういう資料が必要、ということも、出てくるかなと思います。

この辺、皆さんにお配りしたところです。

学習活動の実際 3: 中1とGr8

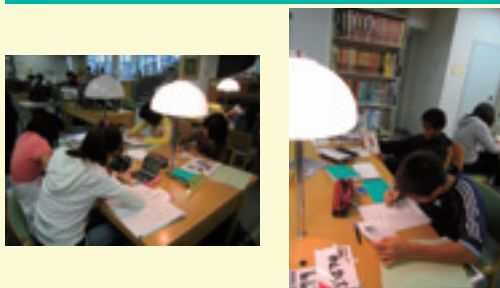


学習活動の実際 3: 中1、中2

- 知の探検隊(総合: 司書教諭 & 情報、理科、国語など) 中学1年
 - リサーチスキルの学習
 - 調べる - 図書館・インターネットの使い方
 - まとめる - レポートの書き方 情報カード
 - 発表する - 1分間スピーチ、プレゼンテーション
 - 教科内容の学習
 - 身体(1学期) / 歴史上の偉大な人物とその業績(2・3学期)
 - 生物・保健 / 科学史、音楽史、美術史、文化史

- 保健総合(総合 / 保健体育) 中学1・2・3年
 - 教科内容: 保健 身体 / 脳・食物 / 性・安全
 - リサーチスキル: 理系レポートの書き方、PPTプレゼン

学習活動の実際 3: 中1



学習活動の実際 3: 高校

- 比較文化(社会科) 高校1年生
 - 生徒の自由なテーマ選び
 - 4~6月: ガイダンス
 - 6月: 図書館オリエンテーション
 - 文献リストの作成に向けて
 - 資料検索の戦略
 - 文献探し、リサーチ
 - 9月~1月: 中間発表 30分ずつ
 - 2月: 論文提出
- 情報の技術 高校総合 / 情報選択授業
 - 司書教諭担当 春・秋学期のみ開講
 - テーマは選択自由
 - レポート作成技術の訓練
 - プレゼンテーションの訓練

利用者と資料の把握

- 自分の学校は、どういう学校なのか
 - 実際に入ってくるのは、どのような生徒か
 - どのような生徒像を目指しているのか
 - 現実と理想像の間の教育に
図書館がどのようにかわれるのか
 - どのような資料を、いつどうやって提供できるか
 1. 学校の構成員の状態
 2. カリキュラム・読書傾向
 3. 図書館資料自体の内容(図書・雑誌・ネットなど)

参考資料

- 『困ったときには図書館へ2：学校図書館の挑戦と可能性』 悠光堂 2015
- 「異文化の出会う場所、図書館」 学校図書館 2008年8月号 p.34-36
- 「テーマの概念をどうとらえさせるか—レポート作成指導のポイント」 学校図書館の活用実践事例集 第一法規 2004年4月 p.5621-5630
- 「バイリンガル学校図書館でも総合学習支援」 学校図書館 2003年6月号 p.68-72
- 「司書教諭のいる学校図書館と情報教育の可能性」 情報の科学と技術 50巻8号(2000年8月号) p.425-431
- SOISホームページ
http://www.senri.ed.jp/site/index.php?option=com_content&view=article&id=166&Itemid=362&lang=ja

この「知の探検隊」は、今、中学1年生や高校生でいろいろ【実施】しているレポート書き及びプレゼンの授業も、私がこういうISでの経験を基にして、積みあげていったということになります。また資料の方等にも出てくると思いますので、また何かありましたら、質問してください。すみません、なにか中途半端になりました。

教育実践共有シンポジウム2016 「学校図書館メディアの構成」

関西学院千里国際キャンパス 図書館
中等部・高等部(SIS)
大阪インターナショナルスクール 幼小中高(OIS)

司書教諭 青山 比呂乃

2016年5月29日 立教大学池袋キャンパス

プロフィール — 司書教諭の現場と養成課程

- 学校図書館メディアの構成
 - 大阪樟蔭女子大学 2005—2014 10年間
 - 大阪大学外国語学部 2008—2010 3年間
- その他の科目
 - 情報メディアの活用
 - 大阪樟蔭女子大学 2009—2014 6年間
 - 大阪大学外国語学部 2009—2010 2年間
 - 学習指導と学校図書館
 - 南山大学 2011— 5年間
- 職歴
 - 大学図書館司書(獣医学系): 5年5か月 1985—1990
 - 司書教諭(幼小中高): 25年 1991.4—

学校図書館とは、を教える

- 図書館の仕事の概要
- 学校の図書館であるとは
- 資料と利用者(生徒・教員)を結び付けること
- 利用者を知る(カリキュラム、生徒、教員)
- 資料を知る(読書材、教材)
- 生徒が自分で情報にたどり着き使いこなす力
 - 情報活用能力(情報リテラシー)の育成

コレクション形成とは、を教える

- 必要とされる情報を選び、用意する — 選書
- 生徒自ら情報に到達可能にする — 組織化
- メディアの性質の理解 — 速さと正確さ
- いかに使わせるか — 機材とメディア選択
- なぜどこにお金をかけるのか — 予算配分
- 実際に学校で図書室を任されたときを想定
 - 目録作成シミュレーションとしての「発注リスト」作成
 - シミュレーションとしての「収集方針」作成

組織化(目録、主題分析)を教える

- 司書の内側の仕事の意味
- データベース構築のための情報入力
- 標準化の感覚
- なぜ、組織化するのか ―利用指導との関係
- 利用の現場からのフィードバックの必要性

補足しますと、これが、今の大学生に、そもそも学校図書館で何ができそうかっていうのを学生の自分の体験ではないところで、こんなことをしているのだよっていうのを見せたうえで、この辺の〔収集や組織化の〕話をしているわけですね。

肝心のコレクションの話になりますが、こういうことを前提にして、じゃあどんなコレクションを作るべきなのか、という話を考えてほしいと。一方でさっきおっしゃっていたように、この科目って本当は、司書

がやっているコレクションを形成する時の選書からはじまって、目録とか主題分析をして、いかにして、利用者がアクセスができるような、件名なり分類なりをつけて、それで生徒たち本人が使えるような形にもっていけるかということなのだという話をするわけです。

ここにちょっとまとめて書いたように、その〔資料収集の〕流れのどこが問題なのかといえば、今、言ったような、〔利用者である生徒の状況から見た必要性という〕観点が必要なこと。それから、生徒が情報リテラシーを上げていくことにどう使えるのか、先生たちが使いやすいようにするにはどうしたらいいのか、ということで「組織化」もすれば、それからメディアはどんどんいろんなものが出てきていますが、新聞とか雑誌とか本とかさまざまなメディアがあって、それぞれメディアの〔内容の〕正確さの面と、スピードというかオンタイムで情報がちゃんと入ってくるという面の、裏腹な部分を、どう捉えてどうすればいいのか、という話もしています。

あとさらに、メディア選択の際の考慮点として、機材が必要なものと要らないものの違いや、機材やメディアの置き場所の問題とかもありますね。そういうことのすべてを合わせて、予算をどう配分して考えるのかということも、現実問題、図書館で働く際に絶対必要な話なので触れています。

ということを考えたうえで、〔図書館資料の〕お買い物リスト作成を目録作成のシミュレーションとしてさせるのを、カード目録をスプレッドシート〔に展開した形〕で作らせるのを兼ね合わせた、発注リストとして作らせることをします。

本当に自分の赴任先の中学で、「あなた〔資格があるなら〕司書教諭をやりなさい」と、いきなり任されちゃって、司書もいない状態だったらどうするか、という意味で、選書を試みないという設定です。選書のツールとして、それこそ『これから出る本』もあれば、ネット上にあるこんなHPもあれば、という、そういう〔紙媒体と電子媒体、流通側と図書館側など〕さまざまな選書ツールを使ってみるということと、シミュレーションとして、こういうお金がこれだけこういうふうに必要な、ということを考えてみて、〔予算請求のための収集方針や計画を〕書いてみることを、実際の大学の授業の場でやってみてもらっているということです。

私もこれを長くやっていましたけれど、100冊リストを学生が3日ぐらいでやるのは、ほとんど不可能なので、いちおう、夏季集中講義でやっているのですが、3日ぐらい今のざーっと目録作りとかを講義したうえで、あとの2回を秋の土曜日に2回ほど取って、つまりそこまでの間に宿題でリスト作りができるようにという時間を取らせてもらっていました。8月に最初の講義があった後に、9月と10月ぐらいに飛ばす形で、そこまでにリストを作って、〔試験の日に〕それも提出という形のやり方で、ずっとこれはやっていました。

100冊分、結構、単純に考えていいし、絵本とかが入ってきてもいいのですけれど、ちゃんと目録を作るのが結構、大変ですよ。[書名や著者名の]読みもちゃんと入れて、読みの「てにをは」をちゃんと書かなければ減点とか、そういうふうにするということです。現在は要するに普通、目録作成は、図書館流通センターなり、共同目録などがあって、いろんな所・形でやってくれる仕事ではありますけれど、あえてやってもらったのです。これは、データベースを作成するというのが、結構、面倒くさい仕事だということを体感してもらうということでやっています。すみません、駆け足になりました。ここら辺は、ざっと言った中身ですね。

メディア＝電子資料の今後

- ・メディアの電子化の行く末 ―英語圏の状況
 - －雑誌/新聞の非紙媒体化
 - －全文データベース 例: Questia school
 - －子どもたちの変化 生まれた時からipad
- ・メディアコレクション形成
 - コンテンツ・パッケージ選択??
 - パラダイム・シフトの影響

一番最後のこれだけが、最近、英語圏の話で、非常に気になっているところです。英語の資料は、今どんどん、今までいいなと思って入れていた雑誌が電子化されてしまっていて紙版がなくなる、っという方向にあります。もちろん極端に[雑誌だけでなく]e-booksを使って、という動きもあって、場合によっては、もう全然、図書館に紙の資料を置くスペースは、要らないんじゃないか、電子化した資料だけでいいんじゃないか、という人たちもいます。いわゆる、

物理的なスペースとしての図書館の使い方に関しては、賛否両論いろいろあるのですが、一方でアクティブ・ラーニングとかコモンズとか、ああいう名前で、今、大学でもだいぶ流行っていますけれど、図書館をそういうスペースとしてしまって、今までのコレクション形成をして云々というのとは違った動きをする傾向が非常に強くなっているという面は、特に英語圏では強くなっていると思うのです。その図書館の、たぶん担当の管理職とか担当のライブラリアンがそういう方向が強いと、図書館がかなりコレクションをちゃんともっていて、それを提供するという発想ではないふうになりそうな感じがとてもあります。

そうなるとういうことかとういうと、例えば、[高校生を利用対象にしたデータベースである] Questia School の中には、全文データベースとして、本の中の一部も入っているし、雑誌の記事も入ってくるし、それで検索すれば必要な情報がなんでもほとんど出てきちゃうんですね、それで賄えちゃうんです。だから、今までのライブラリアンはいらない、となる。だから、ライブラリアンは何をするのか、といえ、このデータベースの使い方を上手く教えるみたい、そういうふうになっていくという面がとてもあります。今まで、専門職としてメディアのコレクション形成をしていた部分が、もう個別のパッケージでこの Questia School を出している会社 Cengage Learning、そこが提供してくれるものに乗るしかないみたいになりそうなのです。[どんなに有用な DB だったとしても] 必ずしもそこにはすべての情報があるわけではなくて、そこ(その会社)が作ったものであるにも関わらず、ある意味で[ネット社会を] google が牛耳っているとか、そういうのと同じように、[リサーチの情報源が]いくつかの、非常によくできている DB に支配されてしまう。

それに対して、「ある企業が作った(集めた)コレクション、図書館の情報源が、その中での話になっていってしまうのかな、それでいいのかな」と思っているライブラリアンは、いっぱいいると思いますし、そのあたりは、たぶん英語圏の図書館大会などに行ったら話題になっているのかな、行ってみたいなのと思ったりもしてはいるのですが、まだ果たせていま

せん。あまりちゃんと追及はしていませんけれども、その可能性はとてもあるのじゃないか
とってはいます。

今、英語圏には、かなり Questia とかいくつかのこうした DB が存在していて、Questia
自体はもう研究者レベルで、全文データベースがあります。あらゆる分野に関していろいろ
あって、もちろん特化したある分野だけのデータベースも存在していますが、とにかく、論
文などが全文で手に入ってしまう。紙版の図書や雑誌その他いろいろなものが図書館にコ
レクションされていて、ということではなくて、その DB の中で探しものをすれば、済ん
でしまうみたいになってきている。それで本当に大丈夫なのかという面と、じゃあ、それ
に対して、どういうふうに指導するべきなのか、学校はどうするべきなのか、というのが、今
後の問題の一つだと思います。日本ではまだ先の話だとは思いますが、日本でも、日本でも
経済的にこれ（図書・雑誌・その他を含む、あるトピックに関する全文記事 DB）がちゃ
んと成り立つまでにはまだかかるかなあ、でも 10 年後はそうかもしれないという感じです。
そういう意味でパラダイムが変わろうとしているかなと思います。

駆け足で、どうも、すみません。

中山美由紀「学校図書館メディアの構成」の教育実践

連続公開シンポジウム
司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する

第2回「学校図書館メディアの構成」



東京学芸大学附属小金井小学校司書
中山美由紀
2016年5月29日(日)
立教大学池袋キャンパス 1104教室

経歴

- ・高等学校国語科非常勤教員
- ・高等学校専任司書教諭
ブランク
- ・C市嘱託職員 学校図書館指導員
- ・東京学芸大学附属小金井小学校 非常勤司書 2004～
- ・大学非常勤講師 2007～ 司書教諭科目 5科目と児童サービス経験
立教大学(2016後期から)
- ・東京学芸大学司書教諭講習 2009～

東京学芸大学附属校小金井小学校の中山です。「学校図書館メディアの構成」を現在はおも
てなく、期間も短かったのですが、まとめてみました。よろしくお願いいたします。この科
目を引き受けるにあたり、私は青山さんの教える大阪外語大に一回お邪魔したことがありま
す。学生たちに発注のリストを作らせる演習はそのまま私もやってみたりしました。

私の最初のスタートは高校の国語科教員です。講師 2 年の後に、1984 年、司書教諭とな
りました。最初は選択国語も担当していたのですが、両立は難しく、授業の方は勘弁させて
いただきました。ちょうど、バブルに入ろうとする景気のいい時代で、私立だったというこ
ともあり、大量の本が買えました。それらを全部、手書きで受け入れて、手書きで目録カー
ドを作り、その目録カードがコピーできるようになっただけマシな状況でした。アナログで
受け入れして目録カードを手書きした最後の世代じゃないかと思います。でも、それがあっ
て、分類であるとか図書館の仕組みを現場で鍛えられたかと思っています。

結婚退職した後、9 年のブランク経て、嘱託職員として公立の小・中の学校図書館を 6 年
間経験しました。そして 2004 年から東京学芸大学附属小金井小学校の非常勤の司書をして
います。12 年経ったのですが、世の中の情報環境がどんどん変わっていくのに学校現
場がなかなか追いついていない、学校図書館も、遅々として進んでいないのを感じています。

大学で教えるほうもいろいろご縁がありまして、2007年の鶴見大学をはじめとして、ほかの大学からもお声をかけていただき、司書教諭科目5科目すべてと「児童サービス〔論〕」の経験があります。今、辞めてしまっているのが「児童サービス論」と「情報メディアの活用」。機器類がどんどん変わってくる環境についていけなくて、とうとうギブアップをしました。この「[学校図書館]メディアの構成」の方も辞めて何年か経っている状況です。この秋から立教大学で「読書と豊かな人間性」をもたせていただくのでちょっと緊張しています。東京学芸大学では、司書教諭講習の「学習指導と学校図書館」の4日間講習の1日だけ、担当させていただいています。

「学校図書館メディアの構成」(2011-2014)

- 履修生 1年生～ 10-25人
- 司書課程の資料組織論既修者も含む

↓

- 学校図書館の基本を補う（役割、用語）
- 学校図書館現場の状況を伝える
- 大学図書館利用の奨励

テキスト『学校図書館メディアの構成』全国SLA 2010年

「学校図書館メディアの構成」は2011年から2014年、専修大学の学部生で教員免許を取る者のみが対象になっていました。他の司書教諭科目では教員免許取得見込みでない学生、司書課程の学生も取れる中、このメディアの構成だけは確実に司書教諭を取りたい人だけが受講しているのは大変ありがたかったです。10人から25人ぐらいというちょうどいい規模の人数だったのですけれども、「学校経営と学校図書館」とか、学校図書館の他の科目を受けていないでい

きなりこの科目を受講する学生もいるのが悩みどころでした。ですので、その辺を補いつつ、なるべく現場の状況を伝えていこうとしました。それから、学生たちは大学図書館で自分の専門分野の棚の前には立つのですが、全体を見ることはなかなかないと気がついてきたので、大学図書館全体も把握して使ってもらうように心がけてみました。

テキストは、2013年は『学校図書館メディアの構成』（「シリーズ学校図書館情報学」編集委員会編，全国学校図書館協議会，2010）、ほかには『学校図書館メディアの構成とその組織化 改訂版』（志村尚夫編著，青弓社，2009）も使いました。

授業概要 2013

情報リテラシーを育成し、


- 学校教育として子どもの学習と読書とを支え、教職員には教材（リソース）センターとしての使命を果たす学校図書館が、備えるべき**メディア**は何か。
- メディアの種類と特性**を理解し、選定して、学校図書館の土台である**蔵書（コレクション）**を構築する方法学び、子どもや教職員が利用しやすい**組織化**について基礎的な知識と実践的な技術の育成を図る。
- 実際に**分類、目録・選書リストの作成、図書館レイアウト**を考えるなどの実務を取り入れながら進めていく。

学校図書館とは？

読書センター

学習センター
情報センター

教材センター
教員サポート



学校図書館法第2条：目的
教育課程の展開に寄与する 学校図書館

自分があげた概要が資料にあります。学校教育として子どもの学習と読書を支え、情報リテラシーを育成し、さらに教材、リソースセンターとしての使命を果たす学校図書館が、備えるべきメディアとは何かというのが一つ目です。多様なメディアについて、利用者として使っている学生たちが、今度は図書館を作る側として視点を変えて理解してほしいと思って

います。二つ目は、学校図書館のコレクションを構築する方法を学び、子どもや教職員が利用しやすくなるように組織化することについての基礎的な知識と実践的な技術の育成を図るということです。そして、最後に分類・目録・選書のリストの作成とか、館内レイアウトを考えるなどの実務を活動として進めていきました。読書センター・学習センター・情報センター、そして教員サポートという役割があり、利用者の半分は大人だと強調するようにしています。

講義の実際(2013)

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. はじめに メディアの種類 | 9. 分類と排架および分類指導 |
| 2. 基本業務(資料1) | 10. NDC 本表編と相関索引 |
| 3. 収集方針と廃棄基準 | 11. 基本目録(書いてみる) |
| 4. 日本十進類法のしくみ | 12. その他の目録と排列 |
| 5. 蔵書構築と資料評価 | 13. ワークショップめざす図書館 |
| 6. 大学図書館の空間調査 | 14. 学校図書館のレイアウト |
| 7. 演習 1つのテーマで各分類 | 15. まとめ |
| 8. 選択ツールと選書(資料2) | |

配慮した点

- ・現場を実感できる教材や実践
収集方針(甲南中学校高等学校) → 学校図書館の役割
学校で使ったプリント NDCの説明 分類演習
- ・大学図書館の利用
いつもの棚以外、全体を見る。多様なメディアにふれる。
視点の転換 利用者→学校図書館の経営者
- ・グループワーク
3人で1テーマで各分類の本 4人でめざす図書館像
- ・用語の確認 NDC NCR MARC ISBN など

実際の講義の概要は、資料に書いてあるとおりなのですが、赤字で示したところ(6, 7, 11)が大学図書館を利用する部分です。大学図書館の利用案内を見れば空間、見取り図が書いてありますが、自身で手書きする時間が1時間と、テーマを決めて大学図書館からいろいろな分野の本を持ってくるのが1時間、それから基本目録を書く時に必ず大学図書館の本を1冊持ってくるようになっていて、大学図書館になるべく行かせるようにしています。あとはですね、3番目の収集方針と廃棄基準は、甲南中学校・高等学校がWEBアップしてくださっているのが大変助かりますね。それを学生に読んでもらって全国学校図書館協議会(全国SLA)の選定基準とも比較してもらったりします。それから、日本十進分類法(NDC)の仕組みは私の実践から、小学生にはこんなふうに教えているのだけれど、中高生だったらどんなものが可能かと考えつつ聞いてもらうようにし、現場の話をするようにしています。NDCの本を実際にめぐりながら、自分が大学図書館から選んできた本の目録を手書きカードに書いてもらいます。今どき、必要ないかと思われますけれども、結局は手書きカードに書いてある内容が、そのまま今は電子目録であるMARCに形を変えて入っているので、一回書いてもらうのがいいと思っています。また、なぜその本にこのNDCの分類なのかを確認してもらうこともします。最終的には、大学の図書館の空間を分類とともに把握したことが、そのまま司書教諭として学校図書館の空間をデザインする力につながっていくとよいと思っています。

基本業務として、資料1「学校図書館コレクション形成の流れ」をみてもらいます。これは帝京大学の鎌田和宏先生と小学校社会科で活用できる学校図書館コレクションということで編集した『先生と司書が選んだ調べるための本』(少年写真新聞社, 2008, P.140-141)に載せたものです。この本の編集は私にとっても画期的なできごとでした。3年生から6年生までの社会科の各単元を、小学校の社会科教育を研究している現場の教員たちから、それぞれ単元がどんな目的でどんなふうに授業をされていくかを解説してもらったうえで、司書たちのもっている本の知識から集めた現物を教員たちに見せました。最終は、教員に選書してもらい、選ばれた本に順位をつけて、授業者として本を紹介してもらうという構成になり

ました。司書には授業ガイドであり、教員にはブックガイドになっています。ですから、司書や資料の専門家がいらない学校図書館には司書代わりとして、このブックリストを役立ててもらうことができます。先の本の 140 ページ 141 ページに載せたものがこの資料 1 です。

私が千葉市の学校図書館指導員だった時に、要件が教員免許状又は司書資格となっていたので、図書館の基本を知らない人たちも多くいました。それで、選書から除籍までの図書館業務を、A4 サイズ 1 枚に入れて作ってみたのです。その後、選書ツールやそのほかの情報を追加してきました。右端に蔵書更新とか、重点とか、多様なコレクション、つまり複本は避け同じテーマでも違う本を揃えて読み比べできるようにするとか、鮮度が必要な分野なのか、学校の中の利用頻度がどうなのか、グレードは子どもたちの発達段階もあれば本の入門書か詳しく書いてある本かとか、鮮度、頻度、グレード（grade＝学年）で全部「ド」の脚韻で揃えたのですけれども、そういうことも考えながら選書していく、そういう視点がポイントだとまとめました。

発注から除籍までは学校の教員の皆さんにはまったく見えない仕事なので、こういう仕事が実はあるのだということをちゃんと知ってほしいし、もちろんこれを学校図書館指導員として仕事にするのならば、知らなくてはならない必須事項としてまとめました。また、ローカルルールで違ってくることはありますけれども、結論として NDC、つまり日本十進分類法で本棚を作る、そういう本棚だから子どもが探せるってことを強調したいと思っています。小・中の現場では、まずは NDC で並べて図書館作りからはじめるということなのです。私の以前、勤務していた高校図書館では目録もあったし、所蔵の有無とか貸出中かどうかはすぐにわかったのですが、2000 年頃の公立の小・中学校の図書館っていうのは、めあての本があるのだからないのだから探し出せず、排架もぐちゃぐちゃでした。同じセットが 5 か所ぐらいから出てくるといって話もあって、「はじめに図書館を作るのですよ」と当時は言わなければならなかったのです。今の大学生はだんだんと整備された学校図書館を使っているのですけれども、司書教諭は「まずは図書館を作る」人だと自覚してもらおうと思いました。「作る」ってことは、利用者である子どもたちあるいは教員たちが「探せる」ってことなのだ、ということを強調しております。配慮した点は、グループワークをいれたこと、用語も基本知識として確認しつつ進めていったことです。

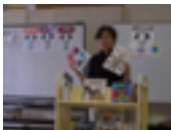

4年国語→日本十進分類法(NDC)

- 分類ということ…仲間分け

▲○×◇▽◎●△▲○●■×▽▲□◇
○◎◎◎●××△▽▽▲▲▲□■◇◇

- 図書館10の仲間分け→始まりの数字【類】

ラベルの暗号を解け！

私が小学校 4 年生に日本十進分類法の話をしているプリントの一部をお見せします。黒い三角形どこに何こあるか、上の段だとちょっとわかりにくい、1 列全部見ないとわかりません。下の段だと黒い三角形どこに何こあるか、指が置けるよね、置いてもらんと子どもには説明します。同じ形、同じ色のものをまとめてある。このように並べたのが図書館の本棚。図書館の本は本の内容ごとにひとまとまりになるように 10 ずつの仲間に分けられているのだという「分類

の意味としくみ」を教えています。おうちの本棚と学校の本棚は違って、ラベルが付いていて、記号がふられているってそういうことなのねと話すと、すごく合点がいくみたいです。小学生ではとりあえず 10 の仲間分けがわかればいいよと、子どもたちには伝えているので、司書教諭の資格を取る学生たちにも、最低ライン 10 の仲間分けは知っていないとだ

めですと言っています。でもその先の百区分、千区分までの暗記が必要かどうかは私には疑問です。NDC が引けて、使いこなせればよいのではないのでしょうか。

日本十進分類法

0類 総記 すべて	
1類 哲学 ころ	5類 技術
2類 時間をさかのぼる 空間をひろげる	6類 育てる 届ける
3類 人間の作ったしくみ	7類 人の表現活動
4類 自然のいとなみ	8類 ことば 文字 作文
	9類 ことばの作品

子どもたちに説明しているうちに、私なりにまとめた0類から9類までの概要はここにあげたとおりです。5類は大きな橋を作っても、ロケットを作っても、お料理を作っても、ミサンガを作っても技術だよと説明しながら、代表的な本を子どもたちに見せていくやり方を小学校現場ではしていることを紹介します。8類と9類はどちらも国語じゃないかとか、5類の技術で鉄道があり6類で交通だからまた電車のことが出てくるのはなぜかとか、そこは鉄道オタク、

鉄ちゃんがだいたいそこで食いついてくるので、そういう場合はどういうふうの説明するのがよいかと大学生に考えてもらったりします。九州新幹線 TSUBAME のデザイナーは5類の技術だけど、日本の国内のどこにどう新幹線が走っているかという交通網になると6類になるよとか、そういう説明が子どもたちにできるとよい、ということです。プリントに10区分に分けられる本の表紙や背表紙を載せたものを何枚か用意して分類の練習をしてももらったりもします。

目録のカードを並べる配列の練習のための資料が、たまたま自分が通信教育で司書資格を取った時に使ったものが残っていて、許可をいただいたので使ってみました。同じ書名で出版年が違ったり、同姓で漢字が違ったりひらがなだったりすると、配列はどうなるかなど目録規則を確かめたりしました。



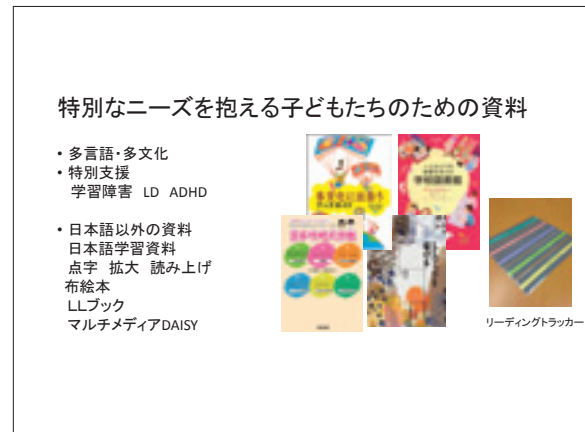
NDCの十区分をやった後に、一つのテーマを班で決めて、そのテーマで0類から9類までの本を見つけようと大学図書館に行き、グループで探してきてもらったりもします。

(中村) なるほど、「階段」についての本が0から9まで。

(中山) あるいは「夜」というテーマですね。次は来週までに自分ひとりのテーマで探してくる課題を出して、なるべく大学図書館という空間に行かせるようにしています。

(足立) デールの「経験の円錐」を使うの？

(中山) メディアの種類が経験との距離を示して、学習と関わってきますよね。さっき吉田先生も言ってくださった『インフォメーション・パワーが教育を変える』のコレクションマップ作成のように、今あるものの概略を把握して今年の重点とか決めるとか、重点コレクションがどう配置されたらよいのかをメディアの種類と空間として考える。それにはやはり同志社国際中学校高等学校の配置図が山内祐平先生の本『デジタル社会の情報リテラシー：「学びのコミュニティ」をデザインする』（岩波書店、2003）の中にあるので、それを見せて考えてもらったりしています。

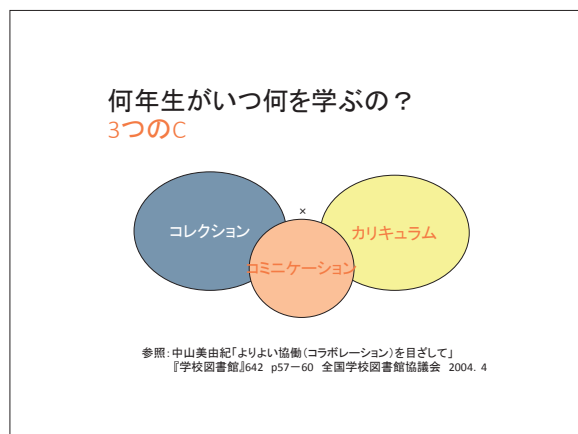


あとは、特別なニーズの資料に触れるようにはしています。学習障害を説明し、読み書きが困難な子どもに有効なマルチメディア DAISY の現物を見せます。ハイライトしたり、文字が大きくなったり、白黒反転したり読み上げる機能を体験してもらって、この教科書版が要求すれば手元に入ることも必ず伝えるようにします。図書以外の資料としてデジタル資料もあるのですが、このほかにも LL ブック、大きな活字の本、布絵本などの資料も、多文化・多言語という視点でも紹介します。帰宅すると、日本語で生活していないご家庭も場合によってはあります。個々の状況に合わせて、マイノリティの子どものニーズに合った資料をこれからは見ていかななくてはいいいでしょう。この4月から障害者差別解消法が施行されました。読みが困難な子に対して何が出来るかは話題になってきたところです。色つきクリアファイルを置くだけでも、格段に見え方がよくなるというケースもあります。図書館用品のキハラ（株）と一昨年から数名で提案して、リーディングトラッカーという読書補助具を商品化販売、普及してもらうようにしました。真ん中が一行分透けて見えるようになっています。あと黒い定規を当てるだけでも読みやすくなるとか、これからの学校図書館は、特別支援学校や特別支援学級だけではなく、普通学級でも合理的配慮として、特別なニーズの対応が必要となるでしょう。



ここは、先の『先生と司書が選んだ調べるための本』同様に、子どもと教員の眼差しで資料を見直すということを言いたいです。今年2016年、偕成社が道徳ブックガイドを配布しています。これは相談を受けたので、以前、うちの小学校で道徳研究をやっていた教員を紹介しました。彼女が学習指導案を二つ提供してくれました。表紙裏には学習指導要領にある道徳の内容項目が一覧となって整理されています。一番後ろには著作権に関する記述があり、偕成社の

ものはこのようにして使っていただいと書いてあります。本の紹介には、道徳のポイントとしてはこの本はこういう内容、こういう主題で使えますと紹介されています。本来は、自分の学校の先生に対して学校図書館員が提供すべきものだっただろうと思います。こういう刺激を受けながら、出版社に作っていただけたならこれを活用しながら、資料をやはり教員と共に授業に結びつけていきたいと思っています。



あと、青山さんの学校でも「知の探検隊」など子どもたちの探究に対応するコレクションが豊かにあるのと同じように、大阪の片岡則夫先生もなさったことを表した本『なんでも学べる学校図書館』をつくるブックカタログ＆データ集：中学生 1,300 人の探究学習から』（リブリオ出版，2001）があります。清教学園の卒論を書く子どもたちがテーマにした主題に対して最低 3 冊ずつ揃えていったら、全体として何とか子どものニーズに応えられる図書館になるだろうと

いう予測を立てて何年間かけてコレクション形成していったのですね。子どもや教員が必要とするであろうテーマや道筋とか、さっき青山さんが「先生のわがままに付き合う」とか、「なかなか言い出さない」とかおっしゃったようなそういう「隠れたニーズ」に対して、こちらから働きかけて踏み込んでいかないと、「使われる図書館」にはならないと思います。コレクションとカリキュラムを掛け合わせる、何年生がいつ何を学ぶかというカリキュラムを知らなかったら学校図書館は作れないでしょ。ただの本好きだけじゃダメなのです。

小説、読書は好きでしたという学生も結構いるのですが、何を読んできたかって聞くとライトノベルズだったりするのですね。そういう状況で、どうやって、この科目を取った学生たちが、広く全体を見据えて図書館を作る人、コレクションを構築していく人になるのかなと考えてですね、100 万円、50 万円で購入リストを作ってもらおうという課題を出しました。加えて、特徴あるテーマを自分で決めてもらって、今年は修学旅行の資料を揃えとか、今年はキャリア教育の資料は充実させるというようなテーマをしのばせて選書・発注リストを出すということを、やってもらったこともしました。

課題

- ・基本なきスタート
- ・NDCはどこまで教えればいいのか
1000区分暗記させるケースもあるが
NDCのしくみがわかればよいのではないかと
- ・蔵書管理システムとMARC
機器類とデータについて具体的に教えるところはどこか
- ・特別なニーズへの対応 合理的配慮
- ・メディアの多様化と学校図書館の設備のギャップ

自分の課題ですけれども、学校図書館をどこまで知っているかよくわからない学生の中でスタートすることがあり、講義を進めつつ、どうフォローしていくかが悩みです。

それから NDC はどこまで教えればいいのかですね。いろいろな分野の本を大学図書館から取ってきてもらい、その分類記号を見ながら逆に、NDC の本で確認してもらうことをやります。日図協で出している NDC が使えるようになればいいかと思ったりします。

また、蔵書管理システム自体とそのシステムと MARC の関係はどういうふうに教えたらいいのか、教科書にはそんなに詳しく出ていませんね。でも大事なことだと思います。あと、特別なニーズはさっき言ったとおりです。

最後は、青山さんが詳しくお話してくださったのですけれども、ポプラ社の百科事典ポプラディアネットに代表されるような、オンライン・データベースがなかなか普及しないことが大きな課題だと思います。2009 年 1 月に全国 SLA の北米視察に参加したのですけれども。その時には「もう冊子体の百科事典は買いません」と言われました。なぜなら、「全部デー

データベースに移行しているから」と。日本もあと 2、3 年したら次の冊子体の百科事典はないと思っていたのですが、ポプラ社からは冊子体の改訂版が出たのですね。たぶん、出しくなかつたとは思うのですよ。日本ではオンライン・データベースが普及しないのがすごく不思議です。新聞も、NIE の活動なんかもあるのですけれども、結局、新聞の紙のものをいくらでも学校に提供しますから使ってくださいという実践になっていて、なかなか新聞データベースを使う方向に行かない。情報教育との学校図書館との乖離ですね。メディアがどんどん多様化していく中で、学校図書館の環境だけでなく情報リテラシー育成のうえでも日本はこのままでいくと世界からどんどん遅れをとっていくと思うのです。そのような状況で、このメディアの構成は何をどこまで教えていくべきなのだろうかというのが私の疑問です。

以上、おしまいです。

(中村) これは？ (プリント「小学校図書館における共同選書の試み」『図書館雑誌』 Vol.101, No.6, 2007.6, p.372-373. を指して)

(中山) これは現在、福島県立図書館司書で、千葉市では同僚だった鈴木知基氏のまとめです。千葉市の新設の小学校のはじめに買うコレクションリストを市内の有志で作った時のことが書かれています。私たちは、NDC と教科とを縦と横軸にして模造紙の一覧表を作り、その枠内に候補の本を付箋で埋めて、全体のバランスや強化すべき分野などを見ていくことがよいとの結論に至りました。公共図書館の学習室を使い、カタログと公共図書館児童室のコレクションを確かめながら、話し合いつつリスト化していったのです。やはり『『インフォメーション・パワーが教育を変える』の] コレクションマップも同じ考え方だと思いますけれども、NDC と教科とその両方の掛け合わせでコレクションを作っていくといいという結論に至った次第です。その視点をもってほしいと、いつも学生に読ませています。

質疑応答

(中山) 即興でやるのですよね？ もう、はじめてもいいですか？

(中村) もちろん。吉田さんからでもいいし、別に青山さんからでも、中山さんからでも。

(吉田) じゃあ、私からやります。それで、回していけばいいのですよね。

(中村) 同じ質問に関しては、私が司会者してもいいけれど。同じ質問に関しては他の人も同時に応えてもらった方がよくない？

(吉田) この質問票を回せばいいのですよね。

(中村) はい、お願いします。

(吉田) では、単独に回答できるものにまず答えます。「体育系・芸術学生を相手に講義する場合、どのように教育方法・教育内容の工夫をなさっていますか」ううん、いや、これ難しいですね。基本的に変えません。でも、教材には自分で勉強できるように URL を貼っておいて、それでとにかく勉強をしてもらってわからなかったらメールで 24 時間受けつけますと言っています。だから、結論からいうと特に工夫はしていないということになります。特別扱いはしないです。わりとニュートラルにやっています。司書科目も司書教諭科目もそうですね。それやったらキリないのですよ、筑波大学は規模が大きくてあらゆる学問領域があり大学院生から体育専攻の学生までいるので、あえて特別扱いはしません。

(中村) その、何でも質問を答えますみたいな話っていうのは、つまり、授業の中で、こちらは当たり前だとある程度思っちゃって言っちゃったことが、いや、全然当たり前じゃないじゃないということがおそらくかなりあるということをあらかじめ言って、もしまあ私が不注意にもそういうことを言ってしまっていることがあったら、お知らせくださいっていうふ

うに最初に言っちゃっているってことですか？

(吉田) そうですね。要するに「レファレンス」や「書誌」の意味がまったくわからない可能性もあるのです。我々の業界には日本図書館情報学会の『図書館情報学用語辞典』(丸善, 2013) などとてもいいツールがあります。今だったら『図書館情報学用語辞典』がインターネット上で「コトバンク」を通じて使えるので、そうした情報を伝えると思います。そういう意味では、「レファレンス」って言ってしまってもインターネットで調べればいいことだから。用語辞典には載っていない言葉はほとんどないと思います。[用語について] 特に質問がきたことはないです。教科書を見ればだいたい書いてあるのでしょうね。

続きます。「レポートの添削で赤をつけるところはどのような基準でしょう」。それは、ときめいたところですね(笑)。

(中村) え。ときめいたところ？(笑)

(吉田) はい。私がなんか反応してしまうところです。

(足立) ちなみに、その具体的には例えばどういうところにときめくのですか。

(吉田) ときめきの例…(笑)。ごめんなさい、にわかにいい例が思い浮かびません。「今日の授業でこんなところが面白かったです」とあって、例えばコレクションマップの話で言えば、学校ってありとあらゆるメディアがいろいろなところに分散しているけれども、総合的に見たら学校全体がライブラリーですよみたいなお話を講義でして、[ミニレポートに]「私もいろいろなものをため込んでいます」みたいなことが書いてあると、そういうところにときめきます(笑)。で、メディアのため込みはやめてなるべく外に出しましょう。どうしても自分でもっていたかったら、リストを作ってそれを出しましょう、みたいなコメントをします。

(中村) 分散配置でも総合目録化しましょうみたいな感じね。

(吉田) そうです、その考えにすごく私は感動したので。

(青山) 「電子資料の学校図書館での扱い方、先生への指導」についてということでご質問をいただいています。これ、要するに大学でどう教えているか、という話のほうなのか、実際、ということですかね。実際、大学でどう教えているか…。大学のほうで教えているのは、一つは電子資料をどれだけその学校で入れられるかっというのが難しいだろうということです。というのは、一般的な学校という場の状況としてです、先ほどポプラディアネットの話も出しましたが。ただ、逆にそういう意味でも、学生が[授業を受けるまでに、こうした電子資料を]使った経験がない可能性がとても高いので、どの科目を担当する場合でもいちおう、ポプラディアネットとジャパンナレッジをその期間だけの限定で使わせるような設定をしています。ポプラディアネットの方は、業者が喜んでということで、その期間だけのお試しIDをもらえるので、それを使って、それも使って何か実習するという作業にしているのですね。

まずは、その学生自身が電子メディアのそういう資料を使ってみないことには、[はじまらないと思います。]使っている経験があれば、「それはああ、これは使えるのじゃないか」となった時に、実際働くことになった時、司書教諭としてか、普通の教員としてかはわかりませんが、その学校の中で「こういうDBというものがあって、これぐらいのお金でここに使えるのは、何とかありませんか」というふうなアクションに結びつくかもしれないという意味で、とにかく講習の時に使わせることはしています。

例えば、「情報メディアの活用」とか、「学習指導と学校図書館」の授業はもうそれを使って何かレポートを書くなり、発表するなり、を生徒がやるのを想定した練習をするという形で、それを使ってみて、実際にどうなのか、できればその比較検討(メディア評価)。いちおう、ポプラディアとジャパンナレッジは百科事典として比較ができるので、これを小学生

に使わせるとしたら、中学生に使わせるとしたらどう思うかという想定で、ちょっとこれだと物足りないとかこういう場合には使えるとか、実際のところ、小学生が、実際に例えば「リラックマ」に関心をもって調べたい。ところがそうした小学生が調べたいものが、この事典でどれだけ出てくるか出てこないとか、そういうことをちょっと考えてもらうっていうような程度のことをやっています。

実際のところ、データベースも英語のほうは本当におお[すごい] というものがあるのですけれど、日本語はポプラディアネットぐらいしか出てきていないっていう状況の中でね、そこまで学生に勧められないという状況もありますよね。でも、さっき言ったような意味で今後、変わってくるし、メディアもそういうふうに出てきています。そして、そのメディアはそれこそ生まれた時から iPad をこんなふうにいじって物心つく前から使っている子たちが学校に入学してきて、それを何か規制する云々ではなくて、そのメディアを学校でどう教える、という状況になっていく中で、どこまでどう [いう種類の資料に予算を配分するのか] ということを考えないと、ということです。

少なくとも、コレクションとして何をもつのか、というさっき言ったような意味もありますし、学校として実際にお金を、ポプラディアも 10 万弱ぐらいかかりますよね、それをどう引き出すのかっていうことは考えないといけないのですから。さっき言ったような発注図書リストを作るっていうところでは、あれは本当に普通の本を買うっていう話しかしないのですけれども、でもこういう電子資料があって、予算の範囲でこういうふうに入れることも可能だということも示す必要がある。

ただ、電子メディアを入れる時、一人しか使えない状況の 1 アクセスだけの導入だと、印刷媒体の百科事典よりも授業で使えなくなっちゃいます。だから、1 コマの授業時間の中でどういうふうに使いまわすのかということも考えなくちゃいけなくなるといった話は、講義の中でしています。

(中村) 今の [答え] は、大丈夫ですか？

(フロア 1) ネットの、サイトの評価とかそういうところまでは？高校生ぐらいだったらもうサイトの評価とかも。もう少しやりたいなって私自身は思っているの。大学生でもできていないので。

(青山) 結局、そこまでの時間を使えないという意味で、大学の授業の中では、本当に既存のデータベースを使う使わないという話プラスアルファ位をしているということです。こう一般論的な意味では、現在、メディアの種類として、電子的データベースにはネットのオンラインのものもあるし、買い切りの、つまり、CD-ROM 的な、今、DVD 的なものはあるけれど、どんどんオンラインのものに移行してきている。そして無料のものも含め、ネット資料の内容を使い手としてどう評価するのか、というのは、どういうことか。つまり人は、高校 [もしくは中学] までの勉強によって、「常識」、つまり、これが良い悪い、これは正しい、これがおかしい、という評価基準になっている「常識」とでも言ったもの身につけている。この常識をまだもっていない、学校の児童・生徒、つまり今まだ学んでいる途中の状態の時に、良し悪しを評価できないであろうということをどう考えるのか、どう教えていくのかということを話したりはしますけれども。大人になって、ネットで得た情報を見て「これ、おかしい」と思うのは、高校までに習っていることがあるから、「これ、変なこと書いている」と評価をしているわけです。そこをもっていない場合どうするのかということを考えて、ネット資料の利用指導をしないといけないよねというぐらいのところまでしか、今のところはいっていません。

(フロア 1) ありがとうございます。

(中山) ついでに、「リストの評価」やっちゃいます？

(青山) そうですね。さっきちょっと言っていた、お買い物リストというか、発注リストというのを私は学生に 100 冊リストを作らせています。それについて、リスト作ってという時に、提出された学生が作ったリストの評価をどのようにしているか、作るだけで大変で満足してしまいそう、という話が質問に出ています。

もう一つの質問は、NCR とか NDC とか BSH の実物をどうやってどの程度整えてやってみることができるか、またやるべきかという質問が出ています。

先に、簡単なほうの後の質問からいきます。NDC とかをどの程度、授業で使ってるか。まず、NCR については簡単にこういうものがあるよと [紹介するにとどめます]。「ここにいろいろな場合についてどう書くのか決まってい書いてある、すごく細かく決まっているよ、こういうふうにしてできているのだよ」と、話をしておいて、そしてどうしてそんなに細かく決まっているのかという部分はそのままおいておく。実際に [リストを作る、という形の目録作業を] やってみると、[具体的に、自分が入れたいと思ったこの本の]「こういう場合、どうしたらいいのか」という疑問が出てきます。そうなってはじめて、「それは、NCR にこういうふうに決められている」と見せれば、「ああ、それで細くなるのだな」ということを [学生は理解できる]。こういう目録規則をやたら細かく、ここはこうなっていないとダメ、と決められているのがどういうことなのかが、覚えなければならないこととしてではなく、実際に欲しい本の目録をとってみることで、どうしてそうなるのかがわかってくる。

それから、実際、今はかなりあいまい検索的なことができるようになってきているけれども、もともと一このピリオドがカンマだったりしてもコンピュータは撥ねる。実際、今の図書館システムとかでも、ちょっと入力違いをすれば撥ねられて出てこないみたいになるっていうものなのだとということも話します。データベースとかコンピュータを使った目録というものは、そういうものなのだとことをわかってもらう必要がある。

私たちが実際に現場で使えるシステムによって、並び順にしろ検索語の切り出しにしろ、このコンピュータのこのシステムは、こう考えているからこういう変なものを検索結果として出してくるということが、生徒から質問が出てきたときに説明できないという面が、今のところしばらくの間は、絶対、学校現場であると思うのです。そういう面の機器というかデータベースの、そういう、すごく単純な、さっきここで [起きた PC のトラブルのような] これが映るのか映らないのかとか、引っ込めるにはどうしたらいいのとか、結局、学校現場の授業の時に困ることは、結構、そういうところなのですよ。生徒に使わせるというシチュエーションとして、ここのところこういうふうしておかないと、授業が 30 分無駄になっちゃうとかというような、そういう [授業運営上、馬鹿にならない周辺] 知識も本当は教職のそういう意味では必要な部分だという気はしているのです。

そういう意味合いから言って、データベース [である目録] を作るということは、どういうことなのか、読みの決め方とかね、そういうのも結局、伝統的に司書の世界でずっときっちりやってきていて、それが今はこんなし崩しになっているところがインターネットの世界であって、よい面もあると思うのですけれども。こういうふうにこういうデータベースが作られているのだということを、学生はどこでも教わることはないと思うので、そういう機会に話す必要はあるかなって思っているのです。

それを全部覚えろとか、それを点数つけて何とかってということではなく、そういう必要があってこういうふうできているっていうことを、だからいわゆるデータベースになった場合も、こういうところがなんかごちゃごちゃごちゃごちゃいっぱい書いてあって見にくく

なっていたりするかもしれないけれど、そういう必要でそういうふうにオーガナイズ（整理）されている。それが上手くできていると、さっき話に出ていた MEDLINE って今、言うかわかりませんが²⁾、医学系のそういう論文データベースなど、かなり相当ちゃんと突っ込んで絞り込み検索ができるように、内容を階層的に分類して構築されているデータベースができていますものがあるのです。それは普通の一般的な NDC を使って作る場合、MEDLINE に比べれば相当ラフなのだけれども、でも発想として、いろんなテーマについてのデータベースを上手く絞り込んでいって必要なものだけを出していくデータベース構築とかデータベースの児童・生徒への使わせ方とか、考慮すべきそういう面があるということ、ある程度、学生に垣間見させる必要はあるかなとは思っています。

(中村) つまり、今のお話をうかがっていると、NCR とか NDC とか BSH とかその本体そのものを持ってきて概説するみたいなことはもうふっ飛ばして、目録そのものを、触らせていく中で説明しているってことかな。

(青山) 目録作業をやってみて、その結果、こういう必要が出てくるから、と学生が関心をもったらもっと詳しく知ったらいい。そういうものだなと納得して使いこなしていくという経験をするのが基本、必要かなと思っています。ただ、NDC と BSH は、目録作業のために、ある程度の量を使ってみないとわからないということもあるので、ちょっときついかない思いながら、100 冊のうちの、100 冊をすべて一から目録を取れ、というのではなく、1 冊はじっくり目録を書いた後は、10 冊は例えば NDL（国立国会図書館）の目録からそのまま写してきていいとか、10 冊は『これから出る本』を見てそこから拾ってしまっていていい。ただ、『これから出る本』のそれは最新情報で NDL ではまだ載っていないかも、[出版社・流通の方のデータだから、図書館の分類記号はついていない] よ、と各種書誌情報ツールの違いを解説します。出てこないものは自分で分類しないといけないとか、件名つけなくちゃいけないという形のリスト（目録）です。だから 100 冊全部、件名つけなくちゃいけない、分類しなくちゃいけないではないのですけれども。どうしても紙媒体の資料やネット上に目録データが見つからなければ、自分で分類、件名をつけないといけないというふうな形で、させているのです。

(中村) 中山さんはでもカード作らせているのだからもうちょっと概説的にやっているっていう理解でいいですね。

(中山) まあ、教科書に載っている程度の確認かな。いちおう、NDC を使ってみますという程度。

(中村) 本だけは触らせて。

(中山) NDC は司書課程のものを、20 冊くらい貸してもらえるので、本表と補助表と二つに分かれているから、その 2 冊の使い方を教える感じですね。あとは、大学図書館から借りてきた本に付与されている NDC を逆引きして確認してもらうことで、馴染んでもらうみたいな使い方です。逆でもとりあえず馴染んでいただくのでいいかなあと。

目録のほうも実はこういう本があって一冊だけ見せて、詳しく規則が決まっているのだけれど、教科書に書いてある程度のことを紹介する程度で終わっています。

(中村) ベクトルが全然、違う。変えているのだ。すごい勉強になりました。たぶん、吉田さんとか、私とかにはそういう発想が…どうですか？

(吉田) 筑波大学は図書館情報学の伝統があるので、だから NDC を 50 冊以上をブックトラックで教室に運搬したりしています。ただ、中山さんがおっしゃった、すでに付与された分類番号を見て、逆にそれを確かめるっていうのは絶対ありだなんて思うのですよね。それから目録を自分で書くのではなく、既存の目録データを見てその記述内容と本の書誌情報を

照合するというようなやり方です。あとはやはり自校資料は重要じゃないですか。それってたぶん何らかの形で目録のようなものを作らなくてはいけないので。そういう意味では、自分で一から目録を作るとしたら自校資料ぐらいではないでしょうか。

(青山) [実際の図書館の] 現場の状況としては、目録作りは、どこかに付与されているものをとってきたり、ネット上であらゆる図書館の分類見て、ちょっと見てみたりっていうことで、いけるといえばいけるのです。でも、それをする【つまりデータの探索と入手、質の良しあしの判断】ができるぐらいになっておいてもらわないといけません。【目録・分類・件名とは、何をしているのか、何のためにしているのか】わけがわかってないと【生徒に検索を教えるにも、自分で目録を使って検索するにも】困るということです。とりあえず、単にそのまんま入っていて、目録を数件写して書いて、目録とはこういうものです、とするというのでは、【面倒だった、という印象だけが残って】結局、利用者が本当に必要なものに辿り着けるようにしなくちゃいけないっていうことがわかっていないっていう状態にはなると思うのです。【これは司書課程でも同じですが。】

今、司書教諭ではなく司書の資格を取っている人も、何でもこういう分類にしているのということがわかっていないことは結構、あります。例えば、コンピュータ関係【の図書】も、【分類しようとする、大雑把に言っても】ネットワークの構築といった面とソフトウェア的な面とハードウェア的な面というジャンルに分かれるわけで、分類的に全然、違ってきます。そういう意味で、物事をどういうふうに概念として捉えていて、それをどう体系づけるかっていうところ【が肝心】なのだということがわかるかという問題だとは思いますが。それをこの分類の課題、件名の課題をする中で、そういうことかってわかってくれる学生は、結構、なるほどと思ってくれるような気はしています。

(フロア2) それと関係するかどうかはわかりませんが、BSHとかNDCを使えるかどうかについて、実は司書課程がある学校と司書教諭【資格付与】しかやっていない学校、大きく違ってきます。例えば司書課程をやっている大学では、例えば20人取りますって言ったらNDCを貸してくれるのですね。一方、司書教諭しかやっていない大学では、NDCちょっと借りたいんですけどという、あゝ図書館に2冊ありますみたいな形で授業で全員分を用意できないのです。たぶん大学によっては現物そのものが使えないところがあるのじゃないかと、これ本気で頭を抱えなきゃいけないところで。たぶん司書教諭だけ単体でやっているところとか、教育センター、自治体の教育センターのところだと現物使うにも使えないってところはちょっとふまえておいた方がいいのかなって。最近だと思います。

(中山) それはそうですね、多いですね。

(青山) 多い。

(吉田) それは、多いのじゃないかな。

(中山) 全国学校図書館協議会がそれを補うようなテキスト作っていましたよね。私はそれで教わった。たぶん今も更新されて。

(吉田) 『学校図書館・司書教諭講習資料』(全国学校図書館協議会編, 2012(第7版))かな。

(中山) でも、やっぱり、現物に触りたいですね。

(フロア2) 触らないと。

(中山) わからない。

(フロア3) テキストにあることを丸暗記したがる人が出ちゃう。

(中村) いや、その何桁覚えてこい、みたいな典型的な話じゃない？わりと。本質のところはどこまでやったうえで、総合させていくかっていうのは重要なことだと思うのですけれど

も。ちょっと、単によく学校図書館のこれからの時代は本当にそこ、そういう規則、この100年でこう確立されてきたそういう規則みたいなもので、知を体系化して考えていくというのが、知を使っていく側の人から見た時の重要なツールとして残っていくのかどうかというのは、青山さんがおっしゃったようなメディアの問題と同じで、すごく「異なる」考え方があると思うのですけれども。とりあえず今のところは日本の図書館は少なくともそれにかかなり拠って書架分類なりをやっているわけですね。件名なんかは本当に、私十何年前とかに教えはじめた時に比べると、学生に伝わり具合が全然…悪くて、自然言語処理とかあいまい検索とかいうものが日常にある人たちに件名を教えても、その意味っていうのが全然…。なんで図書館の為に件名を私たちが理解、件名というシステムを理解しなければいけないのですかっていうのが本音かなって私は思うのよね、彼らの。日本十進分類法はまだ書架の分類と連動しているからっていうのはあるのだけれど。けれど、一方の議論でよく学校図書館職員の「学校図書館メディアの構成」ってわりと批判される時の一つに、やっぱり分類も目録も件名も全部一こ「の科目」に入れて、かつコレクション形成と一緒にして、それが半期の2単位でっていう批判でよく言われるから。実際どこまでこれからも必要だと感じておられるのかな、とかいうのもあってちょっと聞いてみた話だったのですけれども。ベクトルを反対にするとわりと時間は短縮されて本質に近づけるのかな、っていうのは聞いていて「思いました」。

(中山) なんのための分類かっていうのを、やっぱり把握してもらわないと。はじめに分類ありきではなくて、なぜ分類しているのかって、探すためだったりするわけじゃないですか。そこを、やっぱりテストなんかでも聞いて何のための分類ですかっていうことをちゃんと書けるかっていうのはチェックします。

(青山) 「何で分類するのですか」ということね。[いつも試験に出していました。]

(中山) そうそう。だから別にNDCの千区分なんかを覚える必要は全然なくて何のための分類ですかっていったら、自分の言葉でちゃんと書けるほうが大事なかっていう。

(中村) それを今度、何のための件名ですかって聞くと、結構、困る。(笑)

(青山) それで、件名に関して、思うことを一つ。実はね、例えば小学校で件名を使って本当に自分の調べたいことを出すっていうのが非常に難しい理由の一つは、小学校件名「標目表」があるじゃないですか。あれも、英語で何がいうって、小学校から大人までの言葉の差(同じ概念を表す、子ども向き用語とおとな向き用語の差)があんまりない、というところなのです。だから、小学校時代に件名を使うことを覚えて、それをそのままもっていけるのですね。日本の場合、かなり用語が変わるので、大人の使う用語そのままでは、絶対に小学校では無理だけどというところがあるのかなと思います。

(中山) 日本語の問題になるっていうのですかね。

(青山) 小学校件名標目表を、実際に目録でそこまで使うところまで行っていないから、今そのままになっているのでしょう。本当はそこまでちゃんと主体としてちゃんと本が拾えてくるような件名であってほしい。[英語では、子どものお話の本でも、しっかり件名が付いています。]

目録の普通のデータを見ても、英語の図書のほうにはだいたいabstractが入っているのですね。狼さんがこの赤ずきんをどうした、っていう物語のあらすじがそこに入っていて、その中に出てくる単語でもキーワード検索ができる。

[1990年に勤務校が創設された] 最初の頃は、[まだ図書館システムも学校には普及がはじまった頃で、提供されるJ-Bisc、N-Biscという書誌データも] 日本語の図書のデータにはタイトルにはじまるいわゆる書誌データが入っていればいいぐらいの状態で、特に子ども

の本には、件名はついていない。もちろん内容のあらすじなどはない。[当時 Baker & Taylor という取次が送ってくる、装備済図書につけられてくる LC-MARC の] 英語の目録データとの差が大きくて、そういうことか、とため息がでました。

今は、だいぶその意味では、日本語の方が、あらすじが入っているようなデータになってきたですね。だから、それを、[件名ではなく] 自然語検索でもなんでも小学生であっても引っかかってきて、こう「狼の出てくる話」が読みたいとか拾えるようになっているのかもしれないのですけれど。

一方でさっきちょっと話した MEDLINE みたいに、本当にきっちりと構築された論文データベースでは、件名に当たる用語のシソーラスができていて、それによってかなりピンポイントにきっちり必要なところだけ絞り込んだ情報検索することができる、ちゃんと構築されたデータベースを見ている感覚からすると、もともと情報が多いから、それ（的確な絞り込みを可能にするシソーラスの体系づけ）が必要なわけです。

で、英語の場合、用語がかなりちゃんとコントロールしやすくなっている、その子どもから大人まで、同じ用語のという中で、大学などに進んだら MEDLINE のようなそういう世界にもっていけるように、少しずつ「件名によってきっちりコントロールされた書誌情報から必要なものを出してきて、それを使う」ということを、学校教育の中で教えられる、デモンストレーション的にでも、小学生からできる世界なのだなというのが、うーん、と唸られるのですよ。

(吉田) 件名って学生とか子どもたちにとってはたくさんの資料を集めるというより、むしろ絞るために使うものって理解する方がわかりやすいでしょう。キーワードをインターネット検索サイトに放り込んだら結果が多すぎる。例えば、ある作家について調べようとしても検索サイトだと作品から作家情報まで何もかも出てしまうけれど、作家について調べたいのだったら件名で調べると著作は出てこないとか。今までは情報を拾い上げるために使っていた件名は、むしろ情報を絞るために使うものとして説明した方がわかりやすいような気がします。

(青山) 結構、そういう意味では、ネットを普通に検索すると本当に下手するともうすごい数になってしまって、今、目立ったところは Google が先に出したところで適当に拾うってような検索行動になってしまうのを、もうちょっと本当にシステムティックに何かして[教えて] いくようなことが必要でしょう。

それから、その図書のタイトルとか、内容細目などの中に出てこないけれど、この主題はそうだっていう情報もきちんとついた書誌情報が日本に存在し得たらなあ。実は学校の中でネットワーク化している中でそれが学校図書館間でシェアできたら、本当に必要な情報が載っている本を生徒自らが探し出せるような、そういうふうな共同目録的なものが作れないのかどうか、そういうふうには思います。

そういう本当に必要な形のものができない限り、[資料検索を小さいうちから] 教えるのは非常に難しいだろうというのが、一方でありますけれどね。それを英語圏では小学校レベルから用語がもち上がっていて、専門化していくという世界が、紙媒体の時代からあるのを見て、唸っている、というところなのかもしれません。

(中山) その辺、あいまいな検索語とかでも、どんどん進んでいっている感じがしますよね。特に TRC の TooLi を使っていると、もう教科書の学習用語を全部、ピックアップして、本がヒットするような仕組みを作っていて、使えますよって売りに出されているので。もう、あれは便利だよね、になりつつありますね。現場としては。

(中村) そういう業者さんたちとかががんばっちゃっている状況の中で、伝えるべき、時間

の制限もあるし、伝えるべきこととしては、やっぱりもうちょっと、本質として分けるってことと分類するってことってどういうこととか。実際の、さっきのようなベクトルを反対にした目録とは何かみたいな授業ではなくて、なのですかね。いや、勉強になりました。他、何か関連で何かございますか？

(フロア3) もうちょっと何か、件名に関しては、シソーラスみたいなのが、日本語のものであったらいいと思うのです。高校生にアメリカの先生が英作させるときなんかは、「シソーラスを買ってくれ」と言われ、20冊、二人に一冊買って、それで先に調べてから、データベース検索させたことがある。日本の場合は今、何でも検索すれば、出てきてしまう時代で、統制された言葉でなくて、「そのままの言葉でいい」と言ってしまう。逆に言うとその言葉がヒットしなかったら、自分に関する本は棚にもないと思ってしまうということがあるの。もうちょっとその学校図書館レベルのシソーラスみたいなものがあればいいのですが。昔は件名表も、『中学・高校件名〔標目〕表』がありましたけれど。

(青山) 上位概念とか下位概念とか、〔概念体系が〕ちゃんと見えるものがね。

(フロア3) そうそう、そういうものがあればもう少し件名での検索が進むのかなって。逆に統一語で検索すれば、〔自分の知っているキーワードでは探し得ない資料が見つかるというように〕データマイニングみたいなこともできるかもしれない。物事が、件名じゃない言葉でひょっとしたら入っているかもわからないことがありますね。

(中村) いや、それはすごく思う、共感します。国語科教育、日本語の教育の中で、類語辞典をやらないですよ？シソーラスも、なのだけれども、要するに〔英語圏は〕言語をある程度、厳密に捉えているのかな。構造化して捉えようっていうそういうような。国語辞典はやってもさ。と、漢和辞典はやったような気も。もっとも私が教育を受けたのは30年か40年前の話だから（笑）。今の学校現場ちゃんとわかっていないからいい加減なことを言うたあれなのですけど。他に何かありますか。あとさっきの私のもう一つのほうが、興味あるのだけれど、すみません。

(青山) もう一つのほうはなんでしたっけ。リスト評価の話でしたっけ。そうそうリスト評価に関しては、時間がないということもあるのですけれど。でも、提出された100冊リストをざっとチェック、つまり結構、その細かい〔目録規則上のポイントの〕話をチェックして、パーッとリストに入れてきて、まずは、取りあげた図書の目録〔件名・分類も含む〕がひととおり一件できてたらその1点として、合計100点満点。そのところから、エラーが一つあったら、一つのエラーについて0.1引くぐらいのことはしています。説明で言っていた、著者名などの読みがちゃんとできていないとか、要するに目録を取る時に撥ねられるようなところはそれなりにマイナスをすることはしています。

ただ、一番の体感してほしいことは、100冊のリストを目録として、例えコピペで作るにしても、それでも作るのは、結構、大変だということです。データベースっていうのはそういうふうにして作られているから、間違いも起こっているということもわかってもらって、検索して、ずらっと出てきたらそれですべてと思うなところを、そういう意味でわかってほしいということですね。

例えばあれ（目録データ）を絶対に最初に誰か一人は作るわけですよ、それを作るっていうことは、こういうことをしていて、だからミスも起こり得るし、そして、そういうものの積み重ねをみんなが勉強するのに使っているのだけれども、〔目録情報だけから内容を探るのには〕限界があるということも、〔1冊の図書には、あれもこれも書いてあっても〕これしか、目録情報データベースには、入ってないっていうこともわかってほしい。量として

100 ぐらいやって〔図書館の「整理」の仕事、目録の仕事とは〕こんな感じの仕事でこう
いうことなのだなとわかってもらいたい。もしこれで赴任先の学校で、担当者になっても、
そんな外部データベースを入れるのは、だめ、と言われたら、自分で今回やったみたいに、
エクセルに作るしかないかもしれないわけで、ということなのだと図書館の仕事の理解を
してほしい。そこには、司書さんとか言われている人たちがいて、少なくとも司書教諭がや
らなくて済んだとしても、そんなことをやらざるを得ないのだということが理解できるだけ
でも、今の現場ではちょっと意味があるかなっていうほうがむしろ中心です。100 冊作れ
と言っても、100 冊の書誌をまともに作っているわけではないです。

(中村) じゃあ、リストの形成、要するに資料の選定の部分の評価っていうのはしてないの？

(青山) ほとんどしてないですね。いちおう見ていますけれど。私が教えていた大学が、小
学校の先生の免許の一環、勉強はそんなに好きってわけでもない女の子たちという学生だ
ということもあります。

自分の小学校の学校に入れる本ということで、いちおう、選書の言い訳としてね、シミュ
レーションとして設定した学校の、今回設定したのは、こういう生徒たち、学校はどういう
意図をもって、こういう本を入れるのか、という〔収書方針と予算申請書〕は書くことにし
ているのです。そうすると、そこに設定した条件に合わせて、例えば、スポーツに力を入れ
ている学校ならそういう本ばかりズラーっと並んでもいいことになるのです。〔つまりシ
ミュレーションとして、収集方針と予算を考えて文書にしてみるときに〕全体として今年こ
れぐらい本を入れなくちゃいけない計算になって、設置基準的なそういうところから言っ
て、これぐらい本が足りないから、今年は 1,000 冊ぐらい入れます。それで、そのうちの
100 冊分だけを今回のリストにして、これは今年の重点目標のスポーツ振興のためのこう
いう意図をもって、このリストにしているみたいなことを、収集方針と今年の計画みたいな
文書を書かせているのです。

そういうふうなことを考えることが、必要なのだということを体感してもらう感じです。
そこは、本当にちゃんとできる学生は、そういうところ、ああちゃんとわかってきているな
とわかりますし、とりあえず形だけでも作りましてっていうの（提出物）は、それなりに努
力したなっていう、そういう評価の仕方ですね。

(中山) 私なんかは本当に入り口で、データのことは目録カード作ってもらうことと電子
目録合わせるところで私は終わりにしちゃっているんで、完全に発注するっていう行為はど
ういう行為かっていうところを体験してもらいたいっていう、かなり手前のところの目標か
な。そうすると、さっき言ったように NDC と教科の掛け合わせと、今年の重点をもってき
ましてっていう、その資料のバランスっていうか目配りが 100 万なら 100 万、50 万なら
50 万の中でできているかどうかっていうところだけを見ますね。

やっぱり、なんかこう提出期限が短いと、ネットでザザザって探したものを、タタタって
書いて終わりにして出してくるようなものもあるわけですよ。そういうのは評価しない。学
校図書館にいとこんなカタログがやってくるのだよと現物も見せるし、大学図書館には書
評誌もちゃんととってあるから、ちゃんと見るのだよとか説明します。選書ツールにあたっ
ているかあたってないかとか、それは見ればわかるので、評価しているかなあ。

(中村) ありがとうございます。

(中山) 最後の人にいきますか？司書科目と司書教諭科目の違いとかお二人から来ていて、
私にもふられています。青山さんが言えるところはありますか？じゃあ、司書教諭か学校司
書かっていうのは、私はどっちもやっているんで〔先に答えます〕。

今、学校司書としている自分、学校司書って言いたくないのですけれど、学校図書館司書として仕事している今の私の方がよっぽど子どもに指導している状況なのですね。以前、高校には専任司書教諭としていましたけれど、本当にひたすら受け入れして、ひたすら目録を書いていて、ひたすら蔵書点検していたみたい。情報検索指導のケの字もなく、その時の方がよっぽど司書の仕事をしていました。

実は私の中に二職種はないのです、全然。なので、学校図書館の科目として教えているので、とにかくこれを履修する人は学校図書館には必要な人だというスタンスで教えているのが本音です。あえて、差別化するのであれば、あなたたちは教員免許状を取るのだよねと、司書教諭科目を取っている学生には強調します。さっきのNDCの時は、子どもにこう聞かれたらなんて答えるというような、教員としての立ち位置を意識するように促します。なぜならば、数少ない受講生たちの中で、図書館に就職する学生はそうはいなくて、教員になる学生はいるのですよ。埼玉県とか神奈川県とかに。つまり、彼らが学校図書館の担当になってもならなくても、教員としてその学校図書館に関わる言動が子どもの前でできるようになってもらいたいってことは意識していると思います。

(青山) それは本当にそうですね。まず、実際に司書教諭になる学生はほとんどいないのだろうなと思いつつ、でも少なくとも学校にいて教員になるなら、司書教諭というか図書館ということについて理解して使って、図書館にリクエストしてほしいというのが一番あるのですけれど。もう一つは、さっき少し言いましたけれど、司書なり司書的な業務をしている人がその学校に別にいた場合に、その人が何をしているかをちゃんと把握したうえで使うということが、とても意味があると思うのでね。こう言うとおりの科目なのかもしれないけれど、そういう意味では「[学校図書館] メディアの構成」の、「図書館のスタッフはこれを何でしているのか」、「それによって何が本当にできるのか」を理解してもらえればというのが一番根本にありますけれどね。

(吉田) ちょっといいですか。私は講習を担当していたので、司書教諭は図書館をマネジメントをする人ですって言うことは、はっきり言っています。なぜかというと、現場の教員の先生は司書教諭として発令されても一切、業務負担が減らないわけですよ。その状況で担任、部活動、委員会、学生指導の仕事をするわけです。要するに誠実にやろうとすればやろうとするほど本当、大変なことになるから無理だと、授業でそう言っています。人間は有限の肉体しかもっていないのだから、結局、できるとしたら「5分間司書教諭」。先ほどの発表で話した「図書館とにかく一日5分でも心を寄せましょう」とはそういうことです。司書教諭に発令されたのに、図書館にあまり関われないとなるとそれはそれでストレスたまるので、心を寄せながらも業務は今までと通りにやるしかありませんって状況なのです。そうするとマネジメントに徹することになります。マネジメントの責任者だから基本的に図書館のことをすべてをわかっているけれども、自分で手は動かさない。もちろんたまに行き行って手を動かすことも必要かもしれないけれども、日常的には絶対にできないから。それでも図書館のことは全部理解しておきましょうということを、講習では強調しています。

(青山) だから、例えば分類に話また戻しちゃうのですけれども、業者さんがつけていきますよね、ほとんどの場合。そうするとそれを自分の図書館のローカルルールで直せるぐらいの知識はもっていてよね、っていうのは最低ラインかなって思いますよね。

(吉田) すみません。それでちょっと思い出したのですけれど、国立国会図書館のNDL Searchと、国立情報学研究所のCiNii Booksはもう絶対、知っておくといいですよって、それはもう強調します。どちらも学校図書館で使うとものすごく味が出るツールだから、こ

の二つはとにかくブックマークして、何か書誌的なデータを調べる時には絶対にこの二つでと。そういうプラクティカルなリソースを知っておくというのは非常に重要かと思います。(青山) 今のことですが、さっきのリストを作るときのツールとして何を何冊以上ってというのはだいたいどれも5冊とか10冊とかにしているのです。そうすると比較していくので、やりながら、気がついていきます。アマゾンだとほしいデータのこれが出ていないとか。つまり、取次業者系のがやっていると分類記号ついていないとか、件名がついているようで、じゃあ件名って入っているけれど、こっちは要するに物売る側、流通側のカテゴリーになっていることとかに気がつくので、10種類ぐらい。紙版とオンライン版と、それからそのオンライン版も図書館が作っているものと、その販売のために作っているものと、その違いみたいなものが、リスト作りを、時間をかけてやる中で気がついてもらっている。

(中山) 100冊の条件がいろいろあるのですよ、そこを真剣に。

(青山) それが結構、実際に、データの違いを感じられる。それを100冊リストとは別な形で書かせる。レポートではなくて、別に試験の一部としてそこでは書いてもらっていました。実際に使ってみて、どうだったか、結構それなりにこれは使いにくかったとか、こういうのはデータに入っていない、これやるのだったらNDL Searchとか使った方がいいとかってというのは実感してくれているってところはあります。

あと、ここにその今日のこのコレクション形成等っていうのはわりと司書的な業務なので基本的に。司書教諭として何をという部分をご質問いただいているのですけれども。この業務に関しては今、言ったようなことになると思うのですけれど、逆に、司書教諭もそこはかなりわかったうえで、いわゆる調べ学習というか、今、そっちに行こうといういろいろさせている情報リテラシーを必要とされ、それを訓練するような授業をするのに、展開するのに絶対にあった方がいいと言いたい科目だとは思っています。

そういう意味でも、司書教諭と司書の、何が本来違うはずかと言われれば、そういうことを生徒ができるように訓練するような内容の授業をするようなことを、司書教諭にはぜひしてほしいというか、私もそれをしようとしていろいろやってきたという面があります。現実問題、司書教諭に発令されてしまっている先生たちは、この講習とか受けるは受けたとしても、自分自身がそれ(司書教諭がいる環境)で育ったわけではないですね。という、それがだんだんちょっとずつ変わってるかもしれないのですけれど。

だから、実際、「司書教諭、いったい何をする先生」という疑問は[一般に]根本的にあるわけで、それが本当にコンテンツ的には高校の社会科や理科で何でもいいけれど、[何らかの研究なり]そういうことをしたいと思ったら、[図書館などを使って]こういうふうなことができてっていう、その情報リテラシーのいろんな場面に関して、いろんなアドバイスをしたり、トレーニングをしたりということをするのが、文科省ですらいろいろ書いている中で[司書教諭の仕事として]期待されているに違いないはずです。現実、国語科の先生は、こういうことを教えるというようなイメージがまだできていないっていう意味では、いろんな実践の中で、それを全員がやはりリテラシーの教育として実感できるようなものを、もうちょっとさらに、[誰にでもイメージできるように]ポピュラーにしたいことだとは思っています。

(中村) あとは何か質問、意見だとかあれば。

(フロア4) すみません。全然ちょっとベクトルの違う話なのですけれども。現場のいろんな意見を、私は現場の人間だから聞くことが多いのですけれど、「学校図書館とメディアの構成」に関連したことだと、これはどうかなって思っていることがいくつかあって。その一

つは、現場の先生なんかは図書館の整備に着手するのだけれども、よくやっちゃうパターンが教科別に分けちゃうみたい。分類は一所懸命、資格を取ったり習っているはずなのだけれど、なぜそれを基本的に採用した方がいいのかっていうのがたぶんわかっていないのだろうと思うのと。あとたぶん、授業で使われてない、調べ学習とかで使われていないから、もう国語で使うもの。国語でも使えるし、理科でも使えるし、っていうそういうその何かが働いていないっていう。

(中山) 教科横断型になっていないのだよ、頭の中が。

(フロア 4) そうそう。先生の頭の中が、そうっていない、総合されていないっていうのが。それが一つ。その現場の先生が組織化する時の困った例としては。それと、もう一つは、自分の教科に対しては目が厳しくなってレベルの高いものだけを入れてしまいがちになるっていうのがある。それか自分の教科だけ手厚くなりがちだとか。分類っていうのが、そのくまなくって言っても偏りは絶対にあるって思うのだけれども。なぜその学校図書館で少ない冊数でも、いろんな分野のものが必要だとか、そういうのが教えられるのがこの授業なのかどうかとか。そのあたり、私の教えている立場ではないし、自分が学んだ時は、やっぱりその司書課程をもっている先生がダイジェスト版をやったみたいな感じの授業だったので。今のところ、この授業を担当されている方はどういうふうにそういうことを思っているのかなってちょっと気になったので。

(吉田) 担当していないけれどもいいですか? 「図書館の自由 [に関する] 宣言」ってありますよね、資料の収集についてはあの宣言だけでもいいと思います。とにかく宣言をみんなでしみじみ読めばいいと思います。コレクションについてのすべてのことは基本的にあそこに出ていると思うのです。アメリカの「Library Bill of Rights」でもいいと思うのですけれど。要するに多様な観点を重視する、両論あったときは両論を揃えるっていうような原則で、館種は問わないと書いてあるので、それを読めば教科別とか、そういうような発想は図書館の価値観とそもそも相容れない。図書館がコレクションという世界を作っていく時には、学校の教育課程のカテゴリーとは違う力学が働いていますよね。だからとにかく図書館の自由宣言をみんなで読めばいい。授業ではもちろん取りあげて、結構しっかりと説明しています。

(中村) そうだね。自由宣言、やっています?

(中山) まあ、ちらちらっ。

(青山) 私は入れていないので、前から、うーん、どこでどういうふうにもっていこうかと思ったりはしていますよね。

(中山) 「学校経営と学校図書館」 じゃないですか。まさに今回の中村さんのテキスト³⁾ もそうなので。

(吉田) でも「図書館の自由に関する宣言」はプラクティカルなのです、私にとっては。

(中山) ああ、どこでも。

(吉田) それこそ、一冊一冊に対峙した状態で、基本的に「図書館の自由に関する宣言」で資料を選べるはずなのです。

(中村) でも、一方で全国 SLA は自分たちで作ったものでもないし、距離をある種、おいてある一面もあるかなっていう理解を私はしていて。校長会とかさ、ああいうところとかもあれをすごく支持していて、学校図書館のあり方の理念とかもしくは実践の中心のところに置くっていう立場かどうかについてはちょっと疑問があるので。プロフェッションがないこの日本の、学校図書館のそのプロフェッションっていうものがはっきりしていないので、あれに基づけば全部できるっていうのはなかなか。

(吉田) だから理念として捉えると結構、難しい話が出てくるので、むしろ「図書館の自由に

関する宣言」に出ている非常にプラクティカルな部分を参照する。そしてすでに出ている収集方針、甲南中高でしたっけ。そういう文書を宣言とセットで見えていくのです。収集方針のイントロダクションには理念的なことが書かれることが多いのですが、その部分は、宣言と重なる部分があります。イデオロギー的な文書としては紹介しないのですよね、私としては。（中村）でもあれを自分が現場にいて、学校図書館に勤めていたとして、それここにも書いてあるじゃないですか、っていうのはなかなか難しい話だと思うよ。

（中山）とおりにくい。

（中村）司書教諭だとしても私は難しいと思うけれど（笑）。

（青山）一方で、その図書館という場所が、学校の中でどういう場なのか、ということがあります。学校は、授業で先生が教えて、そのとおりにちゃんと答えないとちゃんと点数つかなくて卒業できない、とそういう場所じゃないですか。先生に権威がある。それに対して図書館とは実は、先生ではなく、生徒自身、自分が関心あって自分が知りたいことをちゃんと知ることができるようなそういう場所、先生は関係ない、先生からどう見られていようと、という面があるわけです。

結構、今は、「学校図書館は」先生の学校での教育活動をサポートするというか面を〔強調〕しているけれど、一方で〔一人の生徒が〕その教科とかその勉強ができないのであっても、自分がその中にすごく〔コミットして〕いてそれについて調べたいと思ったものを調べたかったら調べられるという場所、そういう意味の「図書館」というものに触れる入口であるという面があるはずですよ。その〔将来〕一般市民になる人たちが、はじめて図書館を知るという意味で、図書館とは何なのか、自分が自分に本当に必要な情報を得て、それを使って何かをすることができる場であるということを知る場としての学校図書館でもあるのです。

そういう意味で、そういう〔図書館の自由〕宣言の話とかも含めて、一番最近、その例の小説『図書館戦争』のね、あそこであの宣言が取りあげられた時、ある意味一般社会で話題になった時に、ちょっと話が出ていました。権威があって、こうするべきだっていうのが出てくるのに対して、そうではなくていろんなことの可能性があって、いろんな型がある場としての図書館を、ちゃんと確保しておくというのは、すごく必要なことだと思うのです、学校図書館であっても。

そういう意味では、〔学校図書館は〕法律上図書館じゃないっていう面もありますけれど、でも、図書館という機関はそういう面をもっていて、人間の本来の「思想の自由」というものに関してサポートしていくような場所として機能しているということをおっしゃるように、どこかの時点ですべての場合に、入れるべきかなということはありません。

だから、そういう意味で自由になるためには、いろんな方法があっていろんなやり方があってしかるべきであり、逆に〔例えば〕そのネットの世界的には google に支配されそうとか、だから〔いくつかの有力な企業が鎬を削る〕そういう方向にある中でも、政府が〔情報コントロールするかも〕というのもある。いろいろあるけれど、その中で、だからこういういろいろ多様だということにこだわるという面があるのだと思います。これとこれが、いかにもこれが便利だからこれだけってなっちゃいけないと感じるのはなぜなのかとか、というのもすごく重要だと思うのです。だから、そういう場所として、自分が自由になるために、本当にいつの間にか〔誰かに〕支配されている状態に気がつくために、図書館という場所がいろんなものを内に入れていて、存続しているってことは、わかってもらう必要はあるだろうと思いますね。

そういう、例によって、分類に関しても、何年生だとこの比率でとか、配分比率が〔学校図書館メディア基準に〕載っていますよね。とりあえず、あの配分比率も気にして 100 冊

選べとか、学生に無理な課題を言っているのですけれど、とりあえず、自分の 100 冊がどういう配分比率になったかは書いて出せということをしています。

そういう配分っていうことを考えるっていうことも必要があるのだなと理解してもらおう。「うちはスポーツ振興に力を入れている学校なのでスポーツの本をちゃんと入れようとしている」というような収書方針も書かせるのは、基準にあるような普通の割合に対して、うちはこうなのだというふうに自覚して書いてもらうということはちょっとやったりしているのです。ちょっと不徹底ではあるのですけれど、そういうことを考えるのだなと思ってもらう。基準の配分比率も小学校では、読み物が多くしてあるとか、というのは、あれに関する解説、私はちゃんと見たことないのですけどね。どういうことであの比率になっているのか、は、説明ができることまで徹底してはいないけれども、ここからこの数字配列からどういうことが読み取りうるのか、という話はちょっとすることにしています。

(フロア 3) いろんな教科で使われはじめたら、資料も同じテーマでも分類がわかれてくるので、司書教諭は絶対に分類を頭に入れておく必要があると思うのです。

あと、教科の先生がプロモートしていく中で、前の話と関係していくのですけれど、司書教諭はそこでハブになってくると思います。例えば聖書科と保健科が同じようなジェンダーに関する問題を出したとき、保健の先生はスポーツに関するジェンダーをやりたい、聖書の人はもうちょっと女性差別についてやりたいとか、一つのキーワードでもいくつかの分野に資料がわたってくるのですね。先生は、生徒が同じような課題を複数の教科で出されるとは思ってもらえなくて、図書館で生徒は、あっちの教科で出ているから、ちょっと視点を変えて書いたら二つのレポートができるなというようなことを言っている。そういう時に両方とも先生に生徒はこういうふうに書こうとしていますよと伝えていくとちょっと「先生の課題の」視点変えるわってなっていくのですね。視点変えると違う本がいる、そういう形でコレクションがだんだん広がっていく。他のテーマでもそういうことを言っていくことが大切です。その中で、この教科とこの教科で使われたら、最低、この分類の資料は押さえないとダメなのですみたいなことを、逆にこちらの方から、つまり司書教諭が言っていけるようになってくると、資料が揃っていく。逆に資料が揃ってくると授業もしやすいので、「あの授業でこうやっていましたよ、[だから先生の授業でも] できますよ」と言うと、その次の年からでも、「やってみようかな」ということになってくる。何かテーマを言われた時に「この分類とこの分類はこの教科との関連です」というぐらいのことは頭に入れられないといけないと思います。

あとはそれとやっぱりプロモートする、授業をやる。授業を支援する力っていうのも足りない、その授業のコレクションを作ることも難しい。「図書館は独立して自由です」と言っても、あまりそれが強すぎるとそこだけ浮いてしまって、そちらで好きなようにやってくださいという形にされて、教科の先生から相談を受けなくなったりするので、その辺のバランスを取れるっていうことも、すごく大事なかなと感じます。

(中村) 中山さんのそのスライド 5 の、「夜」と「怪談」、これいいよねと思ったのだけれど。私が評価する必要もないのだけれど(笑)。

(中山) ありがとうございます。似たようなことを、つい先週の火曜日かな。[東京学芸大学] 附属小金井中学校の図書館オリエンテーションの 2 時間目に、この館内の本を 1 人 3 冊選んでみようっていう公開授業をやったのですね。いくつかの抽象的な単語を、カード裏返しにして置いておいて、その 40 枚の中から 1 枚引いて、そのお題で分類の違う 3 冊を探してくるっていう、大学生の課題と同じような授業をちょうどやっていました。ブックトークにもつながるし、視点が変わっていくので、短い時間ですが、考えて選んでいました。後でこ

の選び方がいいねと、互いにシールを貼るのですけれども、みんなのシールが多かった子の選書は大人が見てもなかなかでした。そういう発想をね、図書館だけの先生じゃなくて校内研とかにして、ほかの先生にも知ってほしいのですね。

(青山) なんか、国語科の読書のね、読書材を選ぶとかでも、なんかそういうので発想を変えるみたいなのは結構、国語の先生とかいいかもしれないと思うのですけれど。

(中山) 去年(2015年)は、あるプロジェクト(平成27年度文部科学省事業「学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」)の校内研究授業として、公開授業のはじまった2013年以降でははじめて、司書教諭以外の教諭が附属世田谷中で図書館提案の国語の授業をやりました。やっと、東京学芸大学附属でもそんな状況なのですから、なかなか学校図書館ことは担当の人だけがやっていけばいいじゃないかみたいな感じなので、それを本当は、校務分掌でふられてなくても、教員は全員が自分事にしてほしいものだと思います。

また、図書館はいろんな視点が身につく場所だと思うので、吉田先生がおっしゃってくださった自由なところっていうと、普段、教室も、時間割も、子どもも教員の頭の中も全部、教科で、学校の中の活動全部が教科の縦割りで分断されていますが、唯一、図書館だけがその教科から取っ払われた空間になるのだと思います。館内の棚を教科別分類にさえしなければ。ある本一冊が、社会科でも使うし、理科でも使うし、もちろん3年1組の総合学習でもいけるよという視点っていうのは、図書館の空間があってはじめて実感できるのではないかな。そういう意味で、やっぱり「図書館を作る」という大事なことを教えてくれる科目と捉えてもらって、学生・受講生が育っていったらいいなって思いますね。

(フロア5) それに関連して言うと、学校図書館の現場にいる人間が何をするかっていうと、やっぱり自校にある資料を活用する使いこなせる生徒に、自分のところの学校図書館のまず使い方の説明をしますよね。でも、それだけだと、自分の学校の図書館しか使えない生徒を育てても意味がないじゃないですか。だから、やっぱりある程度、公共とか大学とかでも汎用性のある仕組みなのだって、そしてその状態に学校図書館がなっているっていうのもすごく大事なことだと思っていて、そうすると公共でも使えるし。

(中山) NDCでやるのはまさにそこですね。

(フロア5) そのNDCの意味ってというのが、たぶんわかっていると、さっき言ったような教科別にしちゃうようなこととか、たぶんなくなるだろうなって思っています。現場の不思議なことをよく聞くので。それは根っこに何があるのだろうって思ったら、たぶんNDCをちゃんと理解していない、なぜ多くの図書館がそうなっているのかっていうことと。学校が特殊だと思い過ぎっていうか、公共とかの話も自由宣言とかも聞いているのだけれども、でも、学校は別だよってという思いがやっぱり現場の先生にはとても強いので。でも、その学校の中にある程度、異空間って言うてしまうとまた拒否反応があるので、それこそ難しいところなのだけれどもそういうふうにして生涯、使える、大学でも使える、公共でも使えるっていう学校の外に開かれた場所になっていくことがすごく学校教育とか拡がるのだっていう、ちょっとその点が何か上手く、その辺が資料構成にも出るしっていう、学校の授業でしか使うものしか入れないとか、そうするとそんなふうにはすぐにはならないはずだし。何かそういうことがここには盛り込められているといいな、そうすると変な図書館があんまり増えなくていいなって思ったのです。

(中山) でも、学校現場の方も、その教室の中だけの、一方的な学びじゃない方向性に向かってきつつあると思います。教室を飛び出して、学年でとか、他学年でつながるとか、地域の人とつながるとかって、どう考えても社会教育と結びついて地域で子育てみたいな状況にか

なりシフトしてきているとは思う。何か本当に学校図書館がその世の中の窓って言うか、社会に開かれていくハブになるはずですよ。どうやったら先生たちがそこまでの期待をしてくれるのかな。

(青山) 先生たちに納得してもらって意味では、[そのリサーチ活動なりをしたとき、読書支援をしたときに] やはり生徒がどれだけ、おお！というようなことをするかということがすごく大きい。だから、そこをそういう意味で、生徒がいろいろやったあげくの成果物というか、書いたものだったり、口頭のいろいろだったりするところまで見る必要があります。私がやってきた授業「知の探検隊」と関わっているのは、そこが非常に大きいんですね。要するに情報の処理の過程で集めるところから、その前のどういうことについてっていうところから考えていろいろ調べたあげく、何かを作って発信するところまで、司書教諭は関わるべきだと思うのです。

その、全部、自分でやるということではなくて、そこまで把握する必要がある。ただ結果を見に行くというか、発表会を見に行くだけでもいいし、[資料集めを手伝った結果] できたものがどうなったのか、という、司書だとしても、このフィードバックが絶対に必要じゃないですか。こういうことでこういうふうにするのだから、こういうことが必要だったのだ、というのが資料の評価としても出てくるわけです。

それと同時に発表っていうものが、全校の前で何か発表するというふうになるのか、例えばポスターとかをそこら辺に貼ってるのか、レポートとかプレゼンテーションになるのか、何らかの形で先生たちの[目に入る] 範囲に、あの先生のやってるあの教科であんなことができるのじゃないとか、あんなふうになる、あの生徒があんなことやってるといふ発見があると、すごくそれは他の先生には効くのですよ。

それをどう、さっきプロモートっておっしゃったけれど、どう学校の中で上手くプロモーションして、お互いにいい意味で競い合うみたいな方向に学校コミュニティを刺激できるような意味の、それこそ情報リテラシーの仕掛け的な者になれば、ということがすごくありますね。

テクニカルな情報メディアの使い方どうこうっていう、そういうレベルの問題ではなくて、このいろんなアプローチのいろんな教授法的なことのできるのだっていうことを、メディアをもっている側として、「こんなことができますよ」、「やりたい」・「やってみよう」っていう先生とやって、それをちゃんとみんなに見せるというのがどれだけできるかは、結構、大きいかなと思います。「上手くやりたい」とか「できるようになりたい」と思っていない人はいないわけですから。

でも一方で、[先生たちには] これだけすでにできているのにそれ以上やっている暇はないっていうのが、ものすごくあるのです。「これだったらできるかも」にいかにか誘い込むかという意味では、その生徒がどれだけ、その先生が知っているあの生徒がこれだけのことをこういうことでしているというのを上手く見せられるかというのはすごく大きいと思います。

(中村) そろそろお時間でございますが。過ぎていますが。吉田さんのところに最後一質問があるのですか？

(吉田) これは個人的に？

(中山) いいですか？「LGBTQ」。

(中村) いちおう、聞いてよ。これで終わりにします。

(吉田) LGBTQ、21世紀の非常に重要な話題です。もしまた担当できるとしたらコレクションとは何かみたいな話をするとき文化的多様性は非常に重要な概念だと思うのですよね。

文化的多様性を解説する時にマイノリティ利用者への視点みたいなものをもってくると図書館らしい説明ができるのではないかなと思っています。同性愛の話はまさにそういうもの、人の性的な志向というのは多様であって、その多様性みたいなものを図書館では見せることができるのが一つ。あともう一つはやっぱり魂の救済の場所としての図書館っていうのがあると思うのですね。コレクションってそのためのものでもあるので、もちろん、学習教材センターとしての図書館を前面に出していかなくちゃいけないのは、そのとおりなのですが、図書館のオルタナティブな役割の一つとして、救済の場所としてのコレクションという面は確かにあります。具体的に言うと同性愛の子どもたちに来てもらう。エンパワーメントの可能性も込めて。コレクションにそういう力がある、そういう内容を入れたいなと思っています。以上です。

(中山) そういうことだったのですね。わかりました。

(中村) なかなかいい終わり方じゃないですかね (笑)。はい、すみません、お疲れさまでした。ありがとうございました。

-
- 1) 青山 インターナショナル・スクールの典型的なカリキュラムについては、次の URL などを参照のこと。
インターナショナルスクールナビ「インターナショナル・スクールの教育カリキュラム」
http://www.ins-navi.com/recognition/reco_spe.html, (参照 2016-11-28) .
- 2) 青山 現在は、PubMed という名で、一般公開されている。
- 3) 中山 中村百合子編著『学校経営と学校図書館』樹村房, 2015.

シンポジウム当日回収のアンケート結果

(質問別に集計；順不同)

Q1. パネラーへのご質問がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
(吉田先生へ) 体育系・芸術系学生を相手に講義する場合、どのように教育方法・教育内容の工夫（講義）をなさっていますか。	—
LGBTQについて吉田先生におききたいです。	—
「学校図書館メディアの構成」は司書科目の情報資源組織論・演習系と関係が強いと思います。人によっては司書科目の簡易版であるところの科目を評する人もいるようですが、司書科目と司書教諭のこの科目の違い、および重なる内容でも力点の違いなどはどう区別されていますか？（あえて中山さんの答えを聞きたいです）	—
①リストを作るというとき、リストの評価はどのようにされていますか？リストを作るだけで大変で満足してしまいそう？ ② NCR, NDC, BSH は実物をそのていどまでやってみることができますか？又、やるべきだと思いますか？	[准教授]
学校司書が配属されている場合学校司書がこの科目に関するような事務内容をしている場合が多いと思うのですが、司書教諭としてはどのような事務をすればいいとお考えですか？	嘱託講師
吉田先生へ、レポートの添削で赤をつけるところはどのような基準でしょうか 青山先生へ、電子資料を学校図書館での扱い方、先生への指導	嘱託講師
評価はどのように？学生の出来具合？とあわせて教えてください。	—

Q2. パネラーへのご意見がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
お三人のご発表を聞いて、改めて、学図のコレクションのあり方は、学校図の使命をいかにとらえるかに基づいて表れてくると思いました。学図とは何ぞやを教えるクラスとの連携が重要かと思います。	—
学校体験が様々な学生に身近な課題としてどう授業を組み立てられているかがわかり、参考になります。	非常勤講師

Q3. この連続シンポジウムで議論したいことなどありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
例えば FRBR など目録規則が大きく変わったとき追従するか、それともそこまではよいのかなど	—
学校支援で、年に数回、中高生が見学や課外学習、調べ学習、レポート作成などに訪れて、対応するので、参考になります。公共図書館と学校図書館の連携について	[公共図書館 司書]
“読書と豊かな人間性”の講義で次の内容をどう教えておられるのか。①児童・生徒にとって本を読むとはどんな意味があるのか②本の内容を読みとる力・感じとる力の育て方	非常勤講師
司書教諭と学校司書の二職種ができたなかで「司書教諭」科目の内容は変わるのか、「司書教諭」として5科目10単位で学ぶべきことは何か。	教授

Q4. 本日のシンポジウムに対するご意見、ご感想がありましたら、ご自由にお書きください。

回答内容	職名
現職の方がいらっしゃるの、学校図書館に関するメディアの状況等が聞けてよかったと思います。	嘱託講師
近隣の高校生が、課外授業で、1年に2回くらい来館します（集団で）。事前に授業でテーマの設定や基本的な図書館の使い方を教えて、とても準備してくるのですが、OPACと本の往復で、多様なメディアを使いこなすのは難しい子が多いようです。	[公共図書館 司書]
青山先生のお話はIBを実践されている学校の図書館のお話で大変興味深くお聞きしました。	非常勤講師
現在現場を持っておられる方の授業の拡がりの可能性を感じました。この思いをどう実際の授業に生かせるか考えたいと思います。	教授
「学校図書館メディアの構成」は、かなり幅広いそして深いという印象を持ちました。議論の時間が有意義でした。特に終盤の部分（司書教諭に対して…以降）受講者の属性によって到達目標がちがってくると思いました。	主査（学校 司書）

後日のパネラーの振り返り

吉田右子

「学校図書館メディアの構成」の中身は確かに司書科目の「図書館情報資源概論」と「情報資源組織論／演習」に多いに重なっているとはいえ、質疑応答の時に中村さんが発言されていたように学校図書館を対象にして再構築されるべき科目で、その際、重要となるのは学校図書館の資料とメディアを総体的に捉える視点とそれを図書館業務に接続していく学校図書館メディア・マップ構築のような実践だと考えています。

また青山さんと中山さんがお話をくださった「目録」と「発注リスト」のお話は、学校図書館の実践ではすごく大事だと思います。目録の方は手書きで書くことはなくなったとはいえ、書誌データの基本構造は司書教諭として絶対に知っていなければならないトピックですし、発注リストの方は司書教諭の仕事の中核でもある選書の話とダイレクトに関わっているからです。

これからの学校図書館は情報スキルの獲得のための中核的な場所にならなければなりません。それと同時に学校図書館メディアを通して生きのびるための想像力を育んでほしいというのが究極にあると思います。このことは本に救われることが多かった子ども時代の自分自身の実感と図書館研究の両方から今、学校図書館に対して思うことです。司書教諭がメディアのもつ力を生徒に伝えられるようになること、それがこの科目の使命ではないでしょうか。

青山比呂乃

大学図書館勤務後に、英語圏の school librarian（司書教諭）と一緒に 25 年、学校図書館を運営してきて、いろいろな視点を得たことに、改めて気がつかされました。私自身、司書資格を講習で取ったのちに、大学図書館での司書としての実務経験で学んだことが、現在の学校図書館での業務構築の基礎になっていることを考えても、現在の司書教諭養成科目は、まだまだの内容と改めて感じます。

アメリカでは、教員免許を学部で取ったのち、大学院のマスター（修士課程）でライブラリアンの資格を得ます。教員としてまずまずのキャリアを積んだのちに、大学院に行って school librarian になった同僚もいました。勤務校は小さいので、librarian が IB カリキュラム・コーディネーターを兼任することもしばしばです。つまり、school librarian は、まずは基礎的に教員であると同時にあくまで図書館業務に精通した司書であることが求められます。そのうえで、利用者である教員や生徒のニーズを把握する、という意味で、学内での授業他あらゆるカリキュラムや行事なども把握していればなお望ましく、いろいろなレベルでのコーディネーターとしての役割も多く、限りなく管理職に近い職務内容が期待されるのですが、まずは、教員や生徒と対峙した時に、図書館業務に精通していて、生徒・教員がボンヤリ思っているニーズを引き出してアドバイスをくれる人、なのです。司書としての基礎トレーニングが必須です。

今回の「学校図書館メディアの構成」でいえば、これは、もちろんコレクション形成という業務理解のための科目でもあります。一方、図書館の蔵書目録を理解し、使いこなすための訓練でもあります。リスト作成の形で「目録」「分類」「件名」の作業をすることで、はじめてツールとしての目録データベースの意味と限界がわかり、あらゆるレベルの質問が起こりうる学校現場で、児童・生徒の状態に臨機応変に対応する利用指導やレファレンス、授

業援助、そして最終的には、すべての児童・生徒がこうしたデータベースを理解して使いこなすための情報リテラシーの指導ができるはずです。

今の日本では、学校司書は図書館業務・資料のことを把握している人、司書教諭は、生徒の成長・授業カリキュラムに図書館を生かすためにほかの教員と協働する人、という印象がありますが、司書教諭は、せめて現在の司書課程の内容を修め、そのうえで、さらに「学校」という特別な状況に合わせた利用者である児童・生徒への指導、学校全体にかかわる運営について学ぶ、という内容になってほしいと改めて感じました。

例えば、現在、文部科学省が進める、次期学習指導要領の改訂の内容、アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントなど、司書教諭の本来業務に深くかかわる事柄なども多く、もっと司書教諭養成課程でこうした情報リテラシーの育成やアクティブな学習方法が推進されている学校教育全体の動きと絡んだ司書教諭のあり方も取りあげていくべきだろうと思います。そうした現場で今、必要とされている司書教諭の役割を果たして行けるような、学生にも、現場の教員・管理職にも意味がある基礎教育にしたい。これから現場に出ていく学生だからこそ、21世紀にはばたく未来像を描けるような科目でありたいです。

中山美由紀

「学校図書館メディアの構成」は「コレクションを収集して、整理し」、利用者である児童・生徒と教職員の「利用に供する」という、学校図書館が図書館として機能するもっとも基本的な土台を担っているといっているでしょう。しかし、現場の教員には評判の悪い科目です。なぜ分類するのか、なぜ目録があるのかがわからない。ということは、つまり利用者としても図書館のしくみをわかって、使ったことがないからだと考えました。学生についても同様で、図書館を使い倒してはいない。そこで利用者として使っている大学図書館を利用しつつ、館内配置マップを作ってみたり、すでにふってあるNDCやできあがっているMARCから、書誌事項を確認しつつ手書きでカードを書いて学ぶなど、利用者の延長として図書館のしくみをまず知るという学び（教授）のスタイルを取っていたのだと再認識しました。選書から除籍までの資料とディールの「経験の円錐」に触れることを、足立先生から評価していただき、ありがたかったです。現場ならではの具体的な作業と、子どもとメディアの関わりやその意味について意識してもらいたかったのです。

青山さんの発注リストは100冊という冊数制限とさらに、さまざまな情報検索のツールを使って選書するよう条件をつけていらっしゃいます。目録を取るときの「主題」へのこだわりもあって、情報検索のスキルアップにつながる教え方をしていられっしやと思いました。最後に日本語と英語の違いから、小学生の件名は一般件名を言い換えないといけない場合が多くなりますが、英語では大人も子どもも同じ用語が使える、データベース検索が日本語より容易であることという指摘もありました。逆に、アルファベットが読めるからと言って、単語の読みにつながらない英語だからこそ読み聞かせや多読が日本語より重要になっているという指摘もあり、言語の違いが組織化や検索に影響してくると気づかせていただきました。

吉田先生が夏の講習の現場の先生を相手にされている話に特化してくださり、それゆえの工夫は新鮮でした。コメントに朱を入れる、写真でビフォー・アフターや海外の学校図書館を見せてイメージを掴んでもらう、1日5分でいいから学校図書館のことを考える機会を設けよう、棚はゆるゆるにしよう、『インフォメーション・パワーが教育を変える』の中の身近なエピソードからミニレポート課題を出したりなどです。最後のお話として、LGBTQ対応

は魂の救済につながるというコレクションに力があることをおっしゃっていました。単なる場ではなく「コレクション」の集まる場としての意義を考えていきたいと思いました。

現場中心に講義をしていると、「学校経営と学校図書館」「学習指導と学校図書館」「学校図書館メディアの構成」も、コレクションや情報リテラシーの育成という面で、どれも同じ話になってしまうというジレンマがあります。